

家庭・保育所・幼稚園

倉橋文庫

幼児の教育

第六十卷

第四号



4

日本幼稚園協会

KINDER-BOOK
RECARD

新しい

園での保育に！ ご家庭に！

レカード

新装

(4月号) FA 2001 号
発売中!!

〈かわいい

どうぶつの

うた〉

LP 33 $\frac{1}{2}$ 回転・1枚・60円

フレーベル館

61年型の
スマートなレカード!

- 聞いて楽しく、みんなで遊べる、
〈歌うカード〉としてご好評をい
ただいてきました「キンダーブツ
クのレカード」が長い間の経験と
研究の結果、こんど新しい型に生
まれ変わりました。
- こんどは、とてもスマートです。
- 音色も一流レコードと同じです。
- 内容は、日々の保育に、またご家
庭での団らんに最適のものです。
- キンダーブックと併せてお聞きく
ださると、楽しさが倍になります。

幼児のための
紙芝居です



●'61年度幼児テキスト紙芝居全集第1回配本中

いろいろなもののいる道

「おかあちゃんと いっしょにいきた
いな」とぐずっていたショウちゃんは
それでも「いってまいります」とげ
んきに幼稚園(保育所)にでかけまし
たが……「ひとりでも げんきよく」

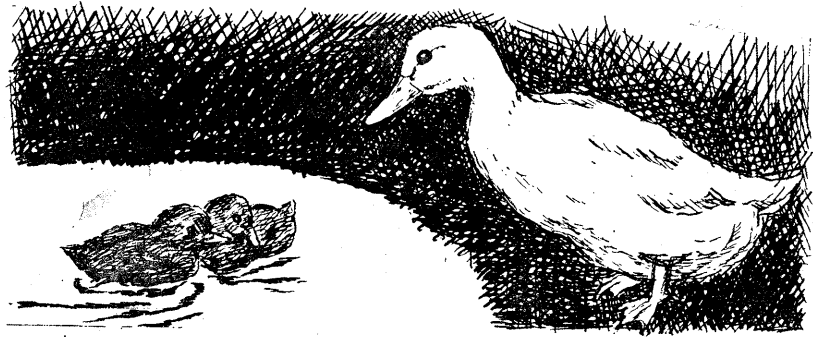
- 12枚
- 280円

ぴんきー ごきげんよう

ぴんきーは幼稚園(保育所)にはい
りました。新しいお友だちは、うさぎや
ふたやぞうさんたち。まだなれないの
でいろいろの失敗をしますが、やがて
……「新しいお友だち」

- 12枚
- 280円

東京都渋谷区千駄ヶ谷5-17(振替東京)株式会社 教育画劇
TEL (341)1458・3227・3400(29855)



幼児の教育 目次

——第六十卷 四月号——

表紙 岩崎ちひろ

幼児期の依頼性と独立性……………	莊司雅子……………(2)
「保育随想」青すずめ赤すずめ……………	葛原しげる……………(6)
庭……………	新庄よしこ……………(8)
幼稚園教育五十年の旅路の感想……………	林 叔子……………(12)
幼児の数概念の発達……………	大崎サチエ……………(14)
幼児の思考の特徴……………	滝沢 武久……………(18)
幼稚園に入園するまで——T・Hの記録……………	……………(22)
つたのみ日記(その一)……………	坂元彦太郎……………(35)
キリスト教幼稚園の現状……………	武南高志……………(36)
幼児の集団あそびの指導(Ⅱ)……………	久富御治代……………(40)
幼児の心理療法 ②……………	……………(45)
母親の養育態度が子どもにおよぼす影響……………	権平俊子……………(45)
固定運動遊具のいろいろとその特徴および教育的意義②……………	……………(50)
固定運動遊具による幼児の遊びの発達についての実験的研究(6)……………	……………(56)
安全に関する理解度について……………	岡本卓夫・石川豊子……………(56)
日本幼児保育史の研究……………	日本保育学会共同研究小委員会……………(61)

幼児期の依頼性と独立性



莊 司 雅 子

一

幼児は文字通り幼いものであり未成熟者である。だから幼児はおとなの社会でひとりで生活することはできない。おとなに依頼してはじめて生きていくことができる。それゆえに依頼性ということがこの時期の生命発展の一つの特徴であるといわれている。ことばを換えていえば幼児は未成熟者だからおとなに依頼しなければならぬ。ところがこの「未成熟」ということばを考えてみなければならない。デューイにいわせると、未成熟ということばの頭文字の「未」は決して否定的な消極的なことばではなくて、むしろ肯定的な積極的

な意味をもっている。幼児はもちろん未成熟者であるに違いない。しかし未成熟とは成熟への可能性以外のものではない。この成熟への可能性の強いことを深い確信をもって唱導した代表者はフレーベルとデューイとである。二人とも幼児が未成熟者であることを、能力に欠けているものであるとか、無能力なものであるとか解釈することはできないと強調している。未成熟を「欠乏」の意味にとるのは、幼児期を本質的にみないで、単に比較的にみるところからくる。実際われわれはしばしば未成熟を欠乏と解釈し、幼児をそのようなものとして扱う場合が少なくない。われわれがおとなを標準とし

て幼児をはかるとこのようになる。ところが、幼児をおとなと比較してみるのではなくて幼児そのものの立場になってみると、未成熟はかえって積極的な力、成長する力を意味することになる。したがって、われわれは幼児を育てる場合、無理に幼児から積極的な行動を引きだしたり誘導したりする必要はない。というのはいやしくも生命のあるところ、そこには必ずや、うちからの旺盛な活動が発露するからである。幼児はもともと自己活動をするものである。だから成長とは子どものためにそこから何かがなされるのではなく、子どもみずからがなすということにある。

このように考えてわれわれは、成人がもっている能力を標準として、幼児を未成熟者と判断することをやめなければならない。同様にわれわれの期待する特性が、現在、幼児に欠如しているからといって、幼児を未成熟者と考えるはならない。こうした考えをすてない限り、われわれは教えることを、あたかも幼児の精神的なもろもろの器官の空洞に知識をそそぎこんで、その欠如をみたくす仕事であるという意味にとる。生命は自己活動的の成長ないし発展を意味するから、幼

年・少年・青年・壮年・老年と区別なく、同様の内的充実と、同様の絶対的要求とをもって、積極的に伸びてゆく。だからいずれの成長段階においても、幼児は成熟しているともいえず、また未成熟であるともいえる。三歳児は将来のかれと比較されると未成熟であるが、しかしいやしくも三歳児としての発達の可能的段階に達している以上、成熟しているといえる。だから教育は年令のいかんにかかわらず、それぞれの段階の成長を可能ならしめ、それぞれの段階に適当な生活を営ませるいっさいの条件を供給する仕事でなければならぬ。従来ややもすれば、教育とはまず幼児の未成熟な状態をできるだけはやくとり去ることであるように理解されているが、それはあやまりである。

二

右のように考えるとき、幼児がおとなに依頼して生活しているのは、無能力者であり力に欠けているということではないことがわかる。それはもつと積極的な意味すなわち幼児が自らの力を自分で独立して用うるためにおとなに依頼してい

るのである。事実幼児は現在のおとなの社会でひとりて生活することはできない。おとなに依頼してはじめて生きていくことができる。しかし依頼性とは何か。依頼性がもし単に無力や無能を意味するものであったら、そこにはなんらの発展もありえない。単に無力や無能力なものはすでにデューイも指摘しているように、一生を通じて他人の厄介にならなければならぬ。ところが依頼性は能力の成長発展に付随するものであって、必ずしも常に寄生的態度をもって進んでゆくものではない。それはむしろ建設的なもの・積極的なものがひめられていることを意味している。もちろん単に他人に擁護されるだけでは、真の成長は遂げられない。というのはそれでは無力なものがいよいよ無力なものになるからである。なるほど幼児は生まれ落ちてから長い間、おとなの社会でひとりて生活することはできない。そのために幼児はおとなに依頼しなければならぬ。しかしそれは生命の無力や無能力を意味するのではない。おとなにくらべて、精神的に肉体的に力も能力も十分でないということである。しかし幼児がこのようにまだ無力にみえるのはデューイによれば、これを補う

ある力が存在していることを暗示している。このことは野獸の仔に比較してみると明らかである。野獸の仔は生まれると同時にひとりて生活できる。鶏の子は生まれれるとすぐ二本の脚で歩くことができる。けれども攀じ上ったり踊ったり滑走したりすることはできない。人間の子は学ばなければできないが、しかし学べばそれが立派にできる。こう考えると、幼児が無器用で他人への依頼性をもっているということは、人間がそもそも他の動物よりも複雑な高尚な社会生活をしなければならぬ特徴をもっているということを意味している。一言にいってわれわれ人間には社会生活に耐えるために、長い間の訓練期間が必要である。いうまでもなく、人間の子は他の動物と異って、そうした訓練に耐えうる素質を持っている。この訓練の必要から幼児は誕生の際はもちろん、その後もひきつづいて自己の生活を他人に依存しなければならぬ。さればと云って幼児の成長発達はことごとくこれを他人に依存していると結論してはならない。幼児は一面他人に依存すると同時に、他面誕生の瞬間から独立を求めている。依存と独立との両者の交錯は幼児の生活にあらわれている。

る。しかもこの依存と独立の原理は、成長したわれわれおとなの日々の生活にもあらわれているのではないか。考えてみると、社会的動物としてのわれわれ人間の生活は、すべて依存と独立との両面生活である。幼児における社会性の最初のあらわれは、フレーベルにいわせると、母親にもらず幼児の最初の微笑である。幼児の最初の微笑は、なるほど一面からみると身体上の自我感情、すなわち気持ちのよいときの自我感情の発露であるが、しかしそれは単にそのような生理的なものではなくて、まず第一には母と子との間の、次には父や兄弟姉妹との間の、さらに後には人類との間の共同感情ないし社会感情のあらわれであるといつてよい。この社会感情はこのようにまず母と父とに、ついで兄弟姉妹に結びつき、遂には隣人と人類とに結びつくから、幼児の最初の微笑は人間形成の上からみて深い意味をもっている。いうまでもなく幼児の社会性はときの進むにつれて次第にいろいろの形をとって変化してゆく。身体の成長や精神の発達の面において、幼児は他人に依存し他人の支持を求めずにはいない。単に身体的の支持だけではなくて、精神的には例えば愛情を求めたり、従

属の感情を欲したりする。特に親から愛されたいという欲求はジャーシルドも報告しているように、年令の長ずるにしたがって種々なる形と強きとをもつてあらわれてくる。ところがこの依存性と反対に、身体的にも精神的にも両親やおとなから独立しようとする欲求も漸次強くなってくる。というのは幼児もまた他に依存すると同時に自己の独立を求めているものだからである。このようにして幼児は自己の能力に適した種々なる仕方、他人の力を借りずに事を行なおうとし、他人に抱かれなくて歩こうとし、他人の監視から離れて自由に歩きまわろうとする。のみならず自分で考え自分で決断し自分で行動しようとする。もちろんこれら二つの傾向がときには衝突する場合もある。それは成長しているしるしであるから何ら気にとめることはない。以上の原理から、わたくしどもはこの四月に迎える新入園児の教育について、いま一度考えてみたいものである。わたくしどもは個々の幼児が独立していくよう手を延ばすのであって、幼児の依頼性を助長するような結果をもたらさないよう日々の保育を工夫しなければならぬ。



保育随想

青すずめ

赤すずめ

葛原しげる

昔も昔大昔、今は国立公園として、絶景を天下に誇っている瀬戸内海が、北へ深く湾入していたという「穴の海」の故地——広島県東部、国鉄山陽本線の福山駅から北西への支線、福塩線南部の沿線一帯の平野でなく——その中途の神辺駅から北東、岡山県の井原駅への私鉄、井笠線一帯の「穴の海」の故地の一部分たる「御領平野」の真ん中に通じている東西一キロあまりの直線道路「中島みち」。

これも昔は、狭い田圃道で、人通りも少なく、人力車が行き違う事も楽でなかったのが、先年、拡げられた上、近郊いくつの

村々と共に神辺町に合併以来、手入れも行き届き、道沿近い田圃の南側に、二階建の大きい校舎二棟の中学校も新築され、文房具店が並んだり、一日六往復のバスもバスしたり、「中学校前」という停留場も出来たりして、今の「中島みち」は活気づいている。

そのバスに乗合った村人の或る日の会話。

「近頃は、どこにも、立派な学校が建ちますのうや、」

「そうよのう。結構な事でのう、」

と、改めて、新築の中学校を窓近く見やつて満足げであった。多くもいなかった乗合の村人たちも、だまって、新築校舎を見やっつて、心の中で、

「学校が立派になるのは、結構じゃのう」と肯いた。

その後数年にして、最近、この中島みちを隔てて、北側に、昔から在る小学校が、老朽の故に、新築工事が始まってからの或る日の村人たちの会話。

「小学校も、新築されるのう、」

「そうよのう。結構な事でのう、」

「大分、大けえのう、」

「大けえよう。結構よのう、」

「やっぱり、二階建と見える、」

「中学校の通りと見える、」

「どっちも、大きな屋根じゃのう、」

「そうよのう、結構よのう、」

毎日とは出かない私も、時折、バスで見通っては、工事の進行を楽しんだ。やがて、大屋根に、白く、板が張りつめられたのが、一日見ぬ間に、青一色に、塗り替えられたのでなく、青瓦で葺きつめられた。広い田圃の中で、目立つこと、おびただしい。バスの中でも、誰彼が、口を揃えた。「結構じゃのうや」「ほんまにのう」改めて見直すまでもなく、反対側の、中学校の屋根は、赤瓦なので、対照がおもしろくて、早速、拙作を試みた。

さて、この小学校にも、あの中学校にも、広い運動場があつて、毎朝始業前から、午後は放課後遅くまで、中学校では、男生徒も、女生徒も鮮やかな白ズボンで、先生方と、熱心にスポーツで、心身を鍛えている。その楽しさを見下して、どちらの学校の屋根の上でもの、雀たちの或る日の

会話――。

「人間の子どもは、いいなア」

「先生と、運動できて……」

「僕たち雀も、この大きい屋根で、運動しようよ」

「そうしまししょうよ。私たちも、ね、ぎ、チイチイ、パッパ、チイパッパ」

とか、何とか、嬉しい屋根の運動場であるに相違ない。

一体、人間の世界では、昔から、朱に染まれば赤くなるといい、誰でも友人を見れば誰でもの人柄が分かるという。また、孟母三遷の訓も古いし、動物の世界では、神秘的な保護色さえ与えられている。

また、人間の世界に、子どもが、いつでも、どこにでもいるのと同じく、雀は、日本中、どこにでも、いつでも、殆んど人間とともにいる。

その雀たるや、鳳凰や極楽鳥の如き豪華な存在ではない。平々凡々の小鳥である。人間の子どもの中には、天才、神童もいるというが、雀には、そんな特殊な存在、有りや無しや知る所ではないが、昔から憎めない小鳥なので、お馬が通れば、「そこの

けそこのけ」であった。また

雀よこい 下りてこい。

お米あげよう さア おたべ

バラ バラ バラ

バラ バラ バラ

である。すると、雀は、いともすなおに、

はい はい はい 来ましたよ

お米 おいしや ありがたや

チュン チュン チュン

チュン チュン チュン

である。

かくて、チルチルミチルの探した青い鳥は、一羽ぐらい、青い屋根にいてくれないものか。終日、青屋根で遊んでいた雀の中に。

赤屋根で、終日遊んでいた雀たちは、皆、夕日をあびて、赤く見えたのか。

ぎんぎんぎらぎら沈む夕日を見ていた友達かみすの頬っぺが、赤く見えるので、鳥の黒い翼も、赤くは染まらないものか。

さて、「青すずめ赤すずめ」が、幼児向でないのは、残念ながら、

小学校と 中学校

どちらも 長い二階建

道路の北のが 小学校

道路の南に 中学校

道路は 田んぼのまん中の

一文字路 広い路

生徒が並んで かよう路

時々 バスも とおる路

小学校は 青い屋根

青好きなのが 小学生

中学校は 赤い屋根

赤好きなのが 中学生

どちらも 広い運動場

子どもが 元気に遊んでる

どちらの屋根も広いので

大よろこびの雀たち

一日 屋根で遊んでて

すっかり 青くなるだらう

小学校の雀たち

ほんとに いないか 青雀

中学校の赤屋根じゃ

一日遊んだ日暮れ方

皆が 赤く染まっていた

夕日をあびた雀たち

いつでも、どこにでもいる日本の雀——
つまりは、いつでも、どこでもで見える我ら
の子ども、わけて、路傍の、通りすがりの、
大事な子どもたちにも、おとなわれらは、お
となの色彩を、つけてはならぬのに、目か
ら、耳から、あまりに多くの、おとなの、
あれや、これやが、よからぬ色彩を、また
音響をさえ、強いているのではなかつたか
——ラジオで、テレビで——いえいえ、子
どもの世界にいるおとなわれらが、ほんの
少しでも……。

さて、さて、私の夢、今のこの世
に、ただ一つの楽しい夢、それこそは、早
く、月世界に旅行して、昔も昔も大昔の、
大々昔から、満月のまん中で、兎がついて
いるというお餅は、ずい分どっさりこと、
つけているに相違ありませんから、あんな
り欲ばって、みんなといわないで、半分ほ

どといっても、ほんとうにどっさりこと貰
って、地球上、世界中の、いえいえ、日本
中のお子さん達へ、お土産にしたいこと、
これ、ただ一つ。

よし、こればかりは、所詮かないっ
のない夢の中の夢にしても、日本中、多く
の幼稚園や、保育所托児所の屋根は、大
い、美しい青屋根赤屋根でありますので、
青雀か、赤雀か、たったの一羽だけでも、
見えないものでございましょうか。

これこそ、もし、おとな私の妙な色彩を、
大事なお子さんへ強いる事に、なりますで
しょうか、おそろしや。それとも、万一、
「そうよのう、結構な事でのう」

ど、どこかの、どなたさまかが、おっしゃ
っては下さりますまいか。(おとそかげん
でもござりませぬ。昭和三十六年正月十五
日。東京西片町宅にて)

庭

新庄よしこ

寒椿のところどころに花をひそませた低

い生垣のその中を、飛石づたいに歩いて行
けば、いとも静かにつくばいに落ちる笥の
水といった風流の庭。或いはずっと趣向を
かえて芝庭の広く大きく、あちらこちらに
人たけ程のたくましき松ばかり、それに添
うかの如く手入れの届いたバラの、これも
数は少なく、このとり合わせ濃緑と淡紅の
なんと雄々しくも美しきかな と忘れられ
ぬ かくて庭のありさまは有名無名数知れ
ず書いても書いてもきりのあるものではあ
りません。今ここで私が申したいのはこう
いうのをいうのではなくて、毎日毎日幼児
との心のつながりの深い幼稚園の庭のこ
と、全くかわりの無い人々からは、なあ
ーんだとでも言われそうな、ところがそう
ではありません。どちらの幼稚園でも園児
のおるかぎり一木一草、枝を折ったら折っ
たで、草が生えればそれで、どんなき細な
ことでも人間の重大な成長の役目をここに
見出すことが出来るので庭というものは保
育室と同じ或いはもっと大切なところと思
っております。

みんながそれぞれうちへ帰ってしまっ
てからあとしばらくの間、お帰りの前には、
紙きれは屑籠へ、砂場には蓋を、古タイヤ

―は積み重ねてと一応かたづけのすんでいるあとを見廻つていきますと、今までの賑やかさが賑やかさだけに、人気の無くなつた庭はみんなの遊びのありさまがしみじみと心に残り沈黙とでもいいたいとき、朝から電線ならんでいた雀の群が安心してか、餌などありそうにもないのに土をほじくつてゐるのが目立つ位。さあこれからが先生としてのあとかたづけのときでありましょう。

こは文京区小日向水道町という、まさしく名称のとおり土地は水が豊富でどこからか少しづつ湧き出ているのをよく見かける、そこで思いついたのは金魚やメダカを飼つて小ぎれいなのも欲しいがまずは遊べる池の方がもっとほしいので、水溜りよりはいくらかましなというのを作ってみました。かたち整い水清澄というには全く遠く、元来こどもは水を好むそれに合わせて作ったもので遊び場としては願つた以上の結果となりました。というのはひき蛙がここから出てくるのを見つけたのですからもともと棲家がこの辺にあつたのでしよう、冬籠りが終りほかほか暖かい日がつづきますとつい浮かれ出てみなさん今年もや

つてきましたよというようにうっかりまかり出てきます。前々からいる長老格壮年達、中にはニューフェースもいるでしょうが、こればかりは絶対にわれわれには見分けがつきません。忽ち大きな金網を伏せられてしまい、押すなおすなの人ばかり、やれ足をのばした、口をあけた目をつぶつたと見たままを言い合う、好みがわからないので勝手にきめて猫あつかいにし餌をなにかやりたいという、水はもうたくさんなのに小皿について入れてやる、こんなにも愛されているのに蛙はそれどころではない、手足を四方にのばし猛練習怠りなし、必至の努力も脱れきれずと知るや観念してぱたつとうずくまつてしまふ、お帰りでみんながいなくなつてしまふと蛙のいるまま金網はとり残されてぼつん立っている、先生はここで放してやるのでやれやれと、ゆうゆう池をめぐって帰って行きます。そのため幼児生活にはごく縁の深いおたまじやくしの発生には事かかず天然自然の発育状態がそのまま見られるわけで先生も蛙をおろそかには思つておりません。これにもまして嬉しいことは、これから夏にかけて沢がにというか自然に出てくるので、体色は

よごれ白、浅水色がすけてみえるのは人間でいえば内臓でしょうか、大きいので二十センチ位、小さいのはあるか無いかの小粒でも見つけたら最後のがすことではありません。これもまた今年も時節が来しました。遊びましょうねとでもいうように池をまわりをさらさらと走つて出る、これはすばやくてすぐ岩かげに隠れてしまふので必ず水槽にびびき二ひきと連れてきてガラスをとおしてその動作やら形やらをみて楽しんでおります。

こんなわけですから、このさきやかな池の周辺はいつも賑やかで、手をつっこむ、掬う、時には足首まで入つてしまひます。さで、あきかん、木片等さまざまちらかつていますが、あの喜ぶ有様は、むしろこのままにしておいて明日のあそびに結びつけておきましようという気になり、かたづけないことにしています。

箱根路をわれ越えくれば伊豆の海や……実朝の詠んだあのあたりを歩いて行きますと、山椿のふと見上げる目に真紅の花が胸をうつ、思えば幼い頃から大すきでした。岡本帰一のコードモノクニという幼稚園向の絵本が斯界を風靡し忽ちみんなの心を強く

とらえたものでしたがそれにもよく紅椿がとりあげられていろいろな絵図きえ今はつきり思い出される位、私はここに来てすぐ一本植えておきました。秋の中ばごろこれに蕾を見つけるとついこのそばを通るのが多くなり、枝先に三つもついでいい花は咲かないのにとちぎり捨てて無慙さをその時はしらず、そのくせせせとこやしをやったりするのとの矛盾はあとから気がついて葉のつやがいいので手入れがわかりますよと植木屋にいわれて変な気持ちできました。二月ごろが盛りでつい先だってまで朝来とみるとぼたぼたとたくさん地に落ちていました。晶子さんの歌 あさましく雨のようにも花落ちぬわがつまづきし一も椿と、一本の椿でもこんなに雨のように、落ちたら落ちたでまた一しほの風情で、あたりを明るく匂わせているのはこの花らしく、色のあざやかさと蕊の大きい大胆さからくる特長でもありませんか、朝登園してくるとまずこの落ち椿のところめがけて集ってきます。もめん糸で通して輪になげる画面は絵としては見かけますが、人数も二人か三人、今は昔の話になつてしまつたよう、幼稚園の人数ではちと無理な

そびでありましようか、せいぜいだ持つて手にしている、砂場に使う、ままごのちそう位のものでしょう。

ところで花はとるべからずの掟はおそれどちらの幼稚園でもよく守られており、それが身につくまでには先生のたまえない心くばりがなみなみではありますまい。この椿の場合、落ちたのはままごのちそうにしていい、木に咲いている時はいけないという、このけじめが三年児二年児の始めはどうもまだ納得できないのはありますまいかとその身になってみる時が度々あります。さすがに年長組はもう心得て見分けをつけ、その心配が無くなつております。こまできまます経路として一例となれば幸い。挿木をしてよく根づいたバラが一本あります、やつと蕾が三つきましたのでこれが咲いたら年長組でも花好きの、きれいな好きの殊に女の子はわが物としたい切なる願いを知っていますし、花ときえ見れば。うっかりちぎつてしまいたい三年児、今まで度々古い経験をしていますので、さあこれが咲いたらどうしましよう先生達と相談しました。その結果そばに連れて行って一しよに見る、昨日あんなだったの

にもう今日は咲いたのねいい匂いね、大事にしましよう、これ何という色などと話しあうのをきりげなく然し変りゆくその様子を度々経験させました。いいあんばいこのところが通じたと見え、みんなも大切なものに思い大輪三つがかなり長い間みごとに庭を飾ってくれました。

砂場には蓋をした方がいいですよと開園当時学校の関係者から言われてそれからずっと七年ばかり今もつづけております。二か所ですから時には、ああめんどうなどひそかに思わぬでもありませんが、こうして今もつづけていくという、そこには止められない深いわけもあつてのこと、というのはどうもこの近所には猫が多くて肥つたの瘦せたの三毛や白黒丹下左膳と名をつけられた片目やら、お帰りでみんないなくなつたと知るや見て見ぬふりで横断して行くのが毎日のよう、ついうっかりして十姉妹の味をしめられたことも二度三度、けれども砂場ばかりは猫からの難を受けたことは一度もありません。始めに注意して下さつた人の好意をしみじみ今更がたく思つている次第でございます。当番二人でこの蓋をしてから帰るといふ役目はきつと果し

ていますがこの当番、時には蓋の上に乗ってしまつて自分のからだの重さで適当にしない、ゆらゆらするのがたまらなく愉快そうで、見つければ一応はとめていますが、時には真ん中からめりつきそうなので、新しい板と取り替える用意はしております。

私のところでは泥のおだんご作りがたいへんはやりました。或る日、五、六本立ち並んでいる棕櫚の根もとにダンボールの箱がおいてあるのを見つけ、何かしらと思いがらかたづけようとすると、先生、それ誰々さんのおだんごがしまつてあるので……と言われあわててもとの通りにしておきました。

このきっかけといえ、これはあとから気がついて思い出したのですが、去年の夏休みの終りころから私はブディングが大好きで不二家の素焼のあの白い容器がずい分たくさんたまつてしまいました。捨てるには惜し、使い道は無しでたまる一方なので、ふと砂場に持って行って使ってもらつたらと思いつき、毎日通うついでに運びましたらいいあんばいに適当に活用されて喜んでいました。その中にこれに砂を入れて板の上に逆さに伏せて、そこには幾つもの

くつも同じかたまりが並び、これを互いに売ったり買ったり、掌にのせてみたり、こまではただ砂場での砂あそびでありました。その中多少の崩れを泥で補つてゆく中にだんだん堅いおだんご作りに変化してしまい、ただもう毎日毎日夢中で、手頃の大きさから豆粒位の、円いのか角目のもの、赤れんがを丹念に時間をかけて粉にして交ぜたり、水で堅めたり、始めの頃は年長組だけでしたが、いつの間にか全園児の遊びとなり、この打ち込んだ姿を見ていますと、なまじ先生の計画の仕事の中に引き入れるのどうかしらと迷いそのなりゆきを見守つて終る日もありました。

おそろしいまでのこの流行には全く考えさせられてしまい、よそではどうかしら、うっかり話して、あなたのとこ、遊具が足りないんじゃないのとは出されなくとも、そんなひけめを感じ、しかし備えるべきは備え、粘土も十分買つてあるし、何もひがむこともあるまいとある研究会で思い切つてこの様子を話してみました。ところがうなずいて下さった方々も大分あり、では私の所だけでは無かったのかとまずまず安心したようなわけでございま

した。中には土を買つて、大きく掘られてしまつた穴をうずめられたそうで、そういうば、花壇やら木の根っこやら方々に穴があいているのを見つけたものでした。そのできたおだんごを、大そう大切に思い、草のかけ、物置のすみっこ、水道の流しの下などにひそかにかくしておくのでこのかくしておくというのが、またたまらなく楽しさを一段と加えるらしいのを知りました。

このように自ら工夫し努力するという経過を先生は貴く大切に思うのですが、家はこの泥のよこれを持ち込んで、お母様が何と思われるやら、これが心配で折をみて了解してもらいましたが何分あつかうのが泥なので、お帰りの時は時間をかけて必ずよく手を洗い、ひびクリームをつけてからにする習慣にしました。

都内の路は殆んど舗装されていて、一帯に泥の面が少ないので、土に対する魅力ということもひそんでいいるのではありますまいか、或いは砂だけの粘土だけのとはまた違つたあつかいの自由さなどがこんなあらわれになつたのでしょうかと考えるもみました。

春日麗々、桜も咲きしだれ柳も裏葉色に

そよぐ四月からはどうなりましようか、遊びもがらりと変るかもしれません、気を付けて見ることにいたしましょう。

(大日坂幼稚園)

幼稚園教育五十年

の旅路の感想

林 叔子

私が幼稚園というものの味を知ったのは、十九才の時でした。師範教育を一か年うけて小学校へ奉職、二か年の義務を終えて、再びもとの巣にかえりましたが、そのころの幼稚園の実際が、私に不安をいだかせました。幸に、大正六年四月東京女子高等師範学校保育実習科に入學出来ましたので、専心、幼児教育の勉強にはげみ、故倉橋惣三先生、故安井哲子先生、特別及川ふみ先生には御指導いただきました。修了後現在に至っておりますが、いつも私を引っ張って、支えている、太い、強い三本の綱があります。それは次の綱です。

1 故倉橋先生が私に金言を下さいました。「馬車馬になって進むことだね」と、お

っしゃいました。私の進むべき方向を御指示くださったのだと、ほんとうにありがたく思つて、今もなお、守りつづけております。耳を覆つて、わきみをしないで、周囲のものに気を奪われぬように、物を正しく判断し、しっかり地に足をつけて、的をしつかり見つめて、真実込めて進むようにとのおさとしました。

2 故久留島武彦先生からは、「あなたは、感謝の二字がほんとうにわかつていますか。感謝は、嬉しい時、幸福な時には、誰も感謝するけれども、ほんとうの感謝は、苦しい時、失敗した時、人にわるく言われた時にこそ感謝するのですよ。苦境に立った時、また一勉強だ、磨をかけるのだ、天が与えた試練に勝つことだと、意気を盛り上げ、困難な事情を切り抜けてこそ、人間として生き甲斐があるのですね」と勇気づけられたことでした。

3 実母宇式かんの踏破して来た幼児教育の道をたどつて歩き、更に新しい天地を開拓することが、私のつとめであるという責任感と意欲。
昨年十二月二日に本園創立五十周年記念

祝典を挙行しました。幸に、明治四十三年七月一日開園当初から現在まで五十周年を重ねた今日もなお健在で、幼児教育の第一線にはたらかせていただいている事は、大きな感激です。はげしい、移り行く社会情勢の中に動きながら、変遷の波に乗つて漕いで来た私立幼稚園経営の苦心、幼児教育、小学校教育の思潮ならびに指導の傾向など、到底僅かな紙面に綴り切れるものではありません。五十年の昔から近代まで、幼稚園の姿は、どのように変遷して来たか、どのように発展して来たか、また進展をばばんでいるものはどんなものか、服装や髪結び方は近代型でも、考え方や指導法において、古い殻を身につけては、役立たないではないか、かびの生えたもの、さびているものを用いてはいないか、常に磨くことを忘れてはいないかしらなど、さまざま反省と新しい息吹きに燃えるものです。

経営管理についても、教育の内容ならびに指導法においても、時代の思潮につれて次々と変わってきました。保育案のつくり方、指導の傾向など、ならべたてたら、さげんがありません。長い間歩いて来た幼

児教育の道をふりかえってみる時、その時代には、その時代にふさわしい教育があつて、今日の進んだ文化の新しい時代の教育が生まれて来た事を見のがすことは出来ません。昔は昔、今は今というかも知れませんが、昔から今日までの連がり、歴史というものは、すてがたいものです。

古い殻をいつまでも身につけていては、役に立たないと申しましたが、昔の事の中にも、尊重したい点が数々あります。「古きをたずねて、新しきを知る」ということを味ってみることも興味ありまた参考資料となると思います。

教育の内容を伝授すること、それが幼稚園教育であると思つてゐるような事実を、見ききすることがありますが、それだけではこの大切な時期の望ましい教育の達成は出来ません。私は、今日の幼稚園教育の実状において深く感ずるものがあります。幼児の私たちに訴へている声をきいて、真実の生活の姿を観察して、ほんとうの資料を得て、もつと内因の奥深いものにふれて、人間基本教育の重要任務にはげみたく切実に希うものです。

学校教育法の中の幼稚園となつて教師の

問題やら、教育内容の新傾向に伴う教育課程の研究、つづいて小学校との関連、家庭との連絡など文部省から指針を示されている今日、お互いに、教育の目的、目標の達成を目ざして、都市において、農漁村において熱心になされていますが、地域社会の啓蒙、理解、認識を高める為の活動には、なお未だしの感があります。遠い将来へ祈りをはせることも大切ですが、日常のたゆまぬ努力こそ効果を生むことになるのです。ことに私立経営においては、設置基準への到達を図りながら、その園のよい環境をつくつていく為には、理論も義務も責任も充分知つていても、その実施に頭をなやますのです。しかし、設立した上は、困難を乗り越えて、第七十七条の目的、第七十八条の目標を達成する為には、適当な環境をつくつて、豊富な経験生活を暮らさせるよう工夫と努力を払ひたいものです。住みよい環境、くらしよい環境をつくることこそ自然生活の中に自然によい教育効果が生まれて来るのです。私は牛の歩みに似た歩調ですが、ささやかなりとも私の夢を実現したいと目下進行中です。園庭に桜樹をたくさん植え、つつじ、さぎんか、紅葉その他常

緑樹と落葉樹を植え、花壇には四季折々の花が咲くようにし、夏は緑陰の下で涼風うけて遊ぶ場を考へるよう配慮し、運動機、遊具、水呑場、手洗場、足洗場(兼備えたもの)を適切に設備して、楽しい経験生活の間に体力も増進し、観察的興味も湧くよう運んでいます。また室内には、ラジオ、テレビ(各保育室ごとに)も設備し、学校放送の時間をたのしく、有意義にすごすようにしてあります。今日の場合、こちらから出かけて、飛び込んで行く教育でない間に合わないと思ひます。創意工夫をこらして、機会をとらえ前進するように努めています。

「こだま」と同じような列車が幾つも走る時代ではありませんか。一生懸命新しい発見に取り組んで、幼稚園の世界の開拓に精進したいと思つてゐます。そして、一方には教職員の待遇に意をはらい、両々相まって幼稚園教育の発展を期したく私の感想の一端を述べさせていただきます。

(静岡市・桜花幼稚園)



幼児の

数概念の発達

幼児の数概念について考察するには、まず幼児の一般的精神機能の発達について理解しておくことが必要だと思う。

発達の最初の段階は、生後一年半位までにみられる特性で、この時期を感覚運動的知能の段階といっている。この期にある子どもは、自己の身体と知覚する外界との分離がまだ生じていない。したがって自己の感性と外界とは混同される。また、自己の主体性も、まだ意識されていない。事物は、現前に知覚されている限りにおいて、瞬間的存在であり、それが知覚領域から姿を消すと同時に、それの実在は意識されなくなる。知覚される、されないにかかわらず、事物は、外界に持続的に、不変的に存在しているという觀念は、この期の子どものには、まだ生まれていない。例えば、生後五六か月の子どもについて、その面前に、人形をおいてみる。子どもはそれを取ろうとして手をさしのべる。その時、人形を布で覆うて見



大崎サチエ

えなくすると、子どもは直ちに動作を中止してしまつて、関心を示さなくなる。これが生後九か月、十か月の子どもになると、覆いを見せてみえなくなった事物を、なお、探そうとするし、探し出すことが出来る。このように眼前からなくなったものを求めようとする動作が現われるのは、子どもに、自己と外界との区別の意識が少しずつ生じはじめたことを示すのである。ピアジェの実験によると生後十か月の子どもを二つの枕の中間に坐らせて、右の枕の下に物を隠してみた。子どもは右の枕の下からそれを発見するのに成功した。次に、子どもの手から、その物を取り、今度は左の枕の下に、眼前でかくしてみた。子どもはやはり右の枕の下を探そうとした。これは前回発見に成功した動作の連続にすぎない。左の枕に空間の転移が出来なかつたのは、このころの子どもには、空間の客観的概念の体制化がまだ十分生じていないためだと思われる。この初期の精神

発達では、子どもにとっては外界は、子どもの知覚に集中されて一慣性のない絵のようなものであって、知覚されているもののみが存在すると考えているところの知覚的自己中心性の特色がみられる。

精神発達の次の段階の特性は、自己中心的思考である。一才半から五、六才までの幼児の心性である。このころになると、幼児は、自我と外界とが次第に分離して来て、事物が現前に知覚されていなくても、それについて考えたり想像したりすることが出来るようになる。前の段階では、外的世界を自己の感性に引きよせて、自分に適応させていたが、この段階になると、自分を外界に適応させることも出来る。例えば、自分の行く手に、何か障害物が横たわっていると、それをまわりみちして目的物に到達する行動がみられるが、これは幼児が外界の物的世界に自分を適応させんとする心的機能の発達を示すものである。幼児は、ことばをもつようになると、自分以外の他の人々に対しても自分を適応させることが出来るようになる。このように、対物的、对人的関係においての行動を通して、自我と自我以外の外界との区別が幼児の心性に、次第に、確立されてくると、幼児は、多くの実在するものの全体の中の一単位として、自分自身を考えるようになる。つまり、この時期から、幼児は、外界の事物を自我とは別個に独立して存在する対象群として考えるようになる。これらの対象群は、因果関係によって結びつけられており、客観的時間、空間の中に定位されている。

しかしながら、幼児は、直接経験においてはその対象群としての

具体的事物の不変的存在を認めはするが、その事物の荷負う物質や、重量やその運動の不変性や、論理的または数量的群概念については、まだ理解する段階に到達していない。これは幼児の心性が、直接経験の具体性に知覚的、情緒的に支配されることが強いいため、対象群の関係やその不変性の認知を邪魔されているからである。幼児が、直接経験の具体性にどのように支配されているかを、ピアジェの共同研究者によってなされた実験を通して示してみよう。

(1)物質や重量の不変性を理解出来ない例。

(a)二つの粘土のボールの中、その一つを円筒形即ちソーセージ形に変形して、球形の粘土と円筒形の粘土との重量の等しさを質問する。

結果、四、五才の幼児は、球形の方が重いと考える。その理由は、球形の方が中味がぎゅちりつまっているからという。また、形が変わったので粘土の量が減ったと考えるものもあつた。七才以上の児童は、殆どどの者が形の変化にかかわらず、物質の重量は不変だということを理解していた。

(b)砂糖を水中に置いて砂糖がどうなったかをたずねる。

結果、五、六才児は、水中にいれられた砂糖は、なくなってしまう。時間がたてば、味もなくなると考える。砂糖を水中に入れると水量を増し、砂糖が解けると水量は減ると考える。

七才以上になると、重量も容積も変わらないと考える。

以上の例でみるように、幼児は、直接的、具体的経験に支配され

易いが、これは事物の不変性の考えが十分に確立されていないためである。したがってこのことが、幼児の合理的推理を妨げている。

しかもその直接経験は、幼児の主観的印象であるが故に、その主観性が客観的世界の関係を支配していることになる。そこで自己中心的「関係の思考」が行なわれる。これを言いかえると、幼児の思考や抽象的概念は、幼児の心性が専ら、感性経験に支配されている限り、思考の自己中心性は脱却出来ないといえよう。

次に、前述の意味での自己中心的思考が、数量の不変性の原理を、幼児に理解させるに、如何に邪魔になっているかを、スツエミンスカという人の実験で考察しよう。

(1)水量についての実験。

コップに入れた一定量の水を、(a)細長いガラスの容器、(b)平たい中広い容器、(c)小さい四角の容器、にそれぞれ眼の前で移してみせ、水量の増減を考えさせる。五、六才の幼児は、一定量の水が容器の形、大きさ、個数などによって増減すると考えた。即ち水量の不変性について推理することが出来ない。

(2)ビーズ玉についての実験。

(a)ビーズ玉(同数)を一対一で並べて玉の数を比較させる。

結果、この場合は凡て等しいと判断する。

(b)一方の群列は同数のビーズ玉の間隔を他方の列よりも、離してならべる。

結果、五、六才児では、間隔をひろげて並べられた列のビーズ玉

が多いと考えた。

(c)同数のビーズ玉をうず高く盛り上げたものと、まばらに置いたものを比較させる。結果、五、六才児は前者の方が多いと考えた。

以上の結果から考察すると、七才以下の幼児には、液体のような連続性をもつ物の量や、不連続的な固体の数が、容器や並べ方の如何にかかわらず不変であるという考えは、まだ生じていないといわねばならない。したがって、この点より推測すれば、不定の拡がりをもつことの出来る基数や序数の観念も、四、五才の幼児にはまだ十分に形成されていないといえると思う。数概念や論理的思考と最も本質的關係をもつものは、幼児が外的事物に対して事物の不変性、持続性の観念を形成しているかどうかということである。しかしながら、幼児が直接的感性経験に支配される限り、その主観性、即ち自己中心性に禍わいされて、外界の現象面に止り、遂に事物の不変性を把握することに失敗するのである。

また、このような心的発達段階にある幼児は、広範囲に拡がる事物の類に関する観念の形成も不十分であるはずである。何故なら、類の観念は不変的に拡がる全体の中で、部分を区別する操作がその基礎となるからである。幼児において、分類が自己中心的に行なわれて、不完全であるのも、この不変性の原理を欠如しているからといえよう。

以上、幼児の精神機能がどのような点に未発達性を示し、それが

幼児の思考にどのような姿で影響しているかを最近の諸研究を通して考察してきたが、これらの基礎的知識を以て、これから幼児の数生活の実際を検討してみよう。五、六才の幼児は、或る範囲の数を唱えることが出来、具体物を一つ一つ数えることも出来る。十以下の数を加えたり、減じたりも、また分割することも出来る。十以下一般に知られている。しかし、幼児の数的思考操作即ち計算活動を更に検討してみると、幼児が直接経験の層で思考操作を行なっていることに、誰でも気付くであろう。そろばんの達人な者が暗算をする場合、頭の中でそろばんをはじいて計算しているのであるが、幼児の数的思考操作も、これと同様の形をとっていると言えよう。幼児の場合は左右各々五本の指がそろばんの役割を果たしている。或る幼稚園での研究を引用してみよう。問題——(自動車がり六台とまりました。また三台とまりました。みんなで何台になりましたか)について幼児に暗算をさせてみた。ひとりの子どもは54と答えた。更にその計算過程を分析してみると、六台の自動車として左手の指五本と右手の指一本を出して六とし、更に三台止ったので右手の指三本を加えた。左手に五本の指、右手に四本の指がばさげられている。子どもはこれに加えることをしないで、直観的に5と4と呼んだ。54はこの幼児の唱える数だったものと思われる。これは幼児の数の計算が明らかに直接経験、即ち、具体性を保持していることを示すものと言えよう。

数生活の基礎的概念として考えられている事物の大小、形、長

短、前後、左右、上下、奥行、遠近などの空間の概念、時間的な概念及び速い、おそいなどの運動の概念などは、素朴な、原始的な形で、幼児にもすでに成立しているのを見る。ここでいう原始的というのは、直接経験による理解の段階を意味している。幼児はこの思考の具体性から抽象性への発達を予期されているのであるが、それにはどのような経過を辿るものであろうか。

幼児はこの直接経験に支配されている間は、自己中心的思考に止るよう運命づけられているが、この自己中心性を脱却して、合理的、論理的思考段階にすすむためには、相対的関係の概念が構成されてこなければならぬ。幼児は、自己を自分以外の人との関係において位置づけることによって、自己中心性を脱却することが出来、事物を他の事物群との関係において位置づけることによって、独立不変の体系における事物の相対的位置が客観的に理解されてくる。幼児が事物の数や量について、直接経験における事物の大きさ、長さ、高さ、形、個数、間隔などを、個別的単位として眺めている間は、知覚的錯覚におちいり、相対的関係を見失い、論理的な思考が行なわれない。事物間の相対的関係の推理や関係相互の推理によって、合理的、論理的思考が、はじめて行なわれるようになる。したがって数量に関する論理的思考が行なわれるようになるのも自己中心性を脱却した七才以上の児童期に求めなければならぬ。

* * *

幼児の思考の特徴



滝沢 武久

幼児は、幼児なりの世界観をもっている。それは、まず、三歳ごろの「質問期」を出発点としている。

質問は、子どもの好奇心のあらわれであり、おとながこれにあたる答えのおかげで、子どもは自分なりに、世界に対するみ方を、つくりあげていく。この好奇心は、いわば感情移入的なものをもっている。ちょうど、野球の観客が、知らず知らずのうちに、観客席から身をおどらせて、投手の身ぶりをやってしまうのとおなじように、子どもの好奇心にも、積極的な行動がともなっている。

だから、ある物についての質問にたいして、その物の性質だけを説明してやっても、答えにはならない。子どもは、その物のとりあつかい方、ないし、その用途を知りたいのだ。

たしかに、子どもの質問のすべてを答えてやるのは、神さままでなければできないだろう。たとえば、

「赤ちゃんは、どこからどうやって生まれてくるの？」

などという質問は、わたくしたちを困らせる。しかし、答えがむずかしいからといって、全然答えてやらないのは、それ以後の知的好奇心の源泉をからしてしまうことにもなりかねない。子どもの好奇心は、この時期の知的教育のもっとも強力な推進力の一つなのだ。だから、わたくしたちは、子どもの好奇心を、むしろ、伸ばす方向へもっていかなければならぬ。そして、そのためには、ものを観察する機会を、豊かにあたえてやる必要がある。

しかし、子どもの目は、けっしてレアリスティックではなく、むしろ、自己中心的にしかものをみない。だから、未知のものの前では、ものごとをすべて、自分自身の経験に還元させてしまう。これは、自分と自分をとりまく世界とが、まだ充分に分化していないことによるのだ。

そこで、子ども独得の考え方がでてくる。たとえば、すべてのものは人間によってつくられたのだと考える「人工論的心性」、すべて

のものが生きていると考える「汎心論的心性」、すべてのものがすべてのものと関係していると考える「魔術論的心性」などがそれだ。

人工論的心性の例（六歳児と四歳児との会話）

——「ぼくは、どうやって赤ちゃんがつくられたのか知りたいんだ。」

——「肉でつくるんでしょ。」

汎心論的心性の例（四歳半の子ども）

——「寒いから、雲が、動くんです。」

——「どうやって動くの？」

——「ひとりで動くんです。寒いとやってきました。太陽が出るといなくなり、寒くなるとまたやってきました。」

魔術論的心性の例。（四歳半の子ども）

——「ぼくは、スープのパンがあんまりおいしくなかったから、足でけりました。足でけると、スープのパンはおいしくなるんです。」

子どものこういう考え方は、おとなのことによって強化されることが多い。おとなが子どもに、空想的なおとぎばなしをきかせてやるとき、また、おとながときどき比喩を会話の中でつかうとき——たとえば、「この仕事は、暗礁に乗り上げちゃったよ」等々。——子どもは、それを自分なりに理解し、子どもの世界観がつくられてしまう。

ただし、世界観といっても、おとなの世界観のように、組織的な

ものではない。おとなのような抽象能力も想像力もっていない上に、子どもは、生活するのに忙しすぎて、世界観の体系などをつくるまでにはいかない。子どもの世界観は、いわば、断片的な世界観なのだ。

ことばは、たしかに、思考の基礎である。子どもの思考は、ことばのおかげで、明確となり、思考が感情や行動に支配されていた状態から、ぬけ出すことができる。具体的な現実を、客観的に眺め、それをよく記憶し、人に話すこともできる。

だから、二か国語をつかう家庭環境の中にいる子どもは、この二つのちがった言語体系に応じて、自分の思考を組織していかなければならぬので、かなり大きな障害を感じる。知的発達が若干おくれることさえある。

だが、幼児は、おとなのことばを、けっして充分には消化できない。アメリカの心理学者のゲゼルは、四歳とは、「口では七十七までいえるのに、じっさいには、四までしか数えることのできないような年令だ」と定義した。つまり、ことばばかりが過剰で、それを裏づける概念の方は、あやふやな時期なのだ。

フランスの心理学者ワロンは、こういう概念の裏づけないことばによる思考を「前範疇的思考」とよんだ。

「前範疇的思考」の典型は、「対」による思考だ。子どもは、ものを考えるとき、いつも二つのものを連想しながら、思考をすすめていくものだ。

白と黒

風と煙

月と夜

など、二つのものが密接にむすびついて、子どもの思考の上にのしかかっている。しかし、対と対との相互関係については、まったく無視されているのだ。

たとえば、ヒヨコが大きくなると、ニワトリになり、ヒヨコは卵から出てくるし、卵はニワトリから出てくることを知っている子どもが、ニワトリが卵から出てくるということは、どうしてもわからない。「卵とヒヨコ」、「卵とニワトリ」という二つの対を関係づけようとはしないのだ。

はんたいに、二つの対を、奇妙なかたちで関係づけることもある。たとえば、「煙と空」、「空と天国」という二つの対がむすびついて、その共通項の「空」がなくなってしまう、「煙は天国だ」という結論を出して、じっさいにそう思いこむのである。

これらは、まったく、ことが現実とむすびついていないために生じる未分化な思考だ。ここでは、思考を分析したり、総合したりするはたらかしはない。こういう思考様式を、ワロンは、「混同性」とよんだ。子どもの思考が、混同性にもとづいているからこそ、さっきのべたような自己中心的な世界観も、出てくるのである。

ところで、子どもが現実をみる目は、きわめて感覚的だ。ものの客観的な関係には目がむかず、その外見ばかりにとらわれている。

「感性的認識の段階」だといってもいい。

たとえば、子どもたちのみている前で、粘土のかたまりの形を変えろ。すなわち、おせんべいのように平べったくおしつぶしたり、ソーセージのように、長い棒をつくったりする。子どもたちは、さっきの粘土に、何もつけ加えられたり、とり去られたりしてはいないことは、よくわかっている。それなのに、ある子どもは、さっきの粘土のかたまりよりも多くなったという。その理由をきくと、「だって、こういうかたち（おせんべい型）にすると、巾が広がるんですもの」とか、「こういうかたち（ソーセージ型）にすると、長くなるんですもの」と答える。また、ある子どもは、はんたいに、おせんべい型はうすいから、ソーセージ型は細いから、さっきの粘土よりも少ないんだ、と主張する。

子どもたちは、ただ、みたままのものを考えるだけなのだ。うすければうすいほど巾が広くなるとか、細ければ細いほど長くなる、とかの関係を考えることはできない。また、かたちがいくら変わっても、もともどもせば、おなじ粘土のかたまりになるのだ、という可逆的な考え方もできない。要するに、子どもには、みたままのものをのりこえて、全体を組織して考える「全体的な見方」が欠けているのである。

こういう思考様式は、子ども絵の中には、きりあらわれてくる。たとえば、人形の絵をかかされると、顔の輪郭の外側に、目や口をかいたり、胴からずれた場所に、腕をかいたりすることがある。こ

のような絵をみて、ひどく心配して、やかましく小言をいう親がよくなるものだが、その結果、子どもたちは、絵をかくこと自体に恐怖心をもってしまい、もう絵をかかなくなるようなことが多い。

だが、じつは、こういう絵こそ、子どもの自然のままの思考を、表現しているわけなのだ。つまり、子どもは、いろいろな要素を、同時に考慮することができないために、正面からみた人形の姿とか、真横からみた人形の姿とかが、並置されたまま、絵に表現されることとなるのだ。だから、必ずしも、この子に、絵の能力がないときめつけるわけにはいかないのである。

子どもが、問題全体をみわたすことができず、順序も組織もなく、断片的にしか考えることができないことを、スイスの心理学者アンドレ・レイは、実験的に確認した。

部屋の中にモノをかくして、子どもにそれをさがさせる。まず、子どもは、部屋の隅にある箱に目がつく。そこで、その箱のふたをあけようとして、部屋を横切る。ところが、途中で、ほかのものに目がうばわれて、そちらの方向へひきかえす。だが、ひきかえす途中で、突然、第三のものが目に映る。で、これをしらべようとして、第二のものの探索も、やめてしまう。子どものこういう行動は、あたかも、水滴の中の滴虫の運動をおもわせるものがある。

ものをさがすためには、まず仮説を立てて、その仮説をじっさいにたしかめ、もしみつからなかったら、またちがう仮説を立てて、たしかめる、というやり方が必要なのだが、五歳以前の子どもに

は、それができない。仮説をつくらないで、すぐに、自分の行動が効果的であると思ひこんでしまう。そして、子どもの探索は、仮説によってみちびかれているのではなく、つきつぎに目に映る外部の刺激によって、いわば外側から、みちびかれている。だから、何とも何ども、おなじ場所をさがすこともあるし、全然触れることなしに終わってしまう場所もある。

しかし、五歳をすぎるところから、きわめて原始的なかたちだが、一種の計画性が芽生えてくる。

たとえば、鈴木ビネー知能検査で、「一度に命令された三つの用事をすまずこと」は、五歳になればできなければならぬ仕事だとされている。五歳以前の子どもは、一時に、たった一つの用事しかひきうけることができないものであって、もし二つ以上の仕事をやらせても、一つ以外の仕事は、忘れてしまうのだ。順序をふんで、気を散らさないでやるということは、幼児にとっては、たいへんむずかしいことなのだが、しかしこれは、関係的思考の出発点である。

たしかに、幼児の思考には、頭の中で、論理を組み立てて、推理したり判断したりするはたらきは、まだできていない。しかし、この時期に、日常生活の中で、具体的なものや具体的な行動を通じて、ものの論理的な関係に目をむけさせることは、これからきき、子どもの考える力をのばしてやる上に、ぜひ必要なことなのだ。

この時期に、直観的に獲得した論理性は、小学生期のあいだに、内面化されていくのである。

幼稚園に入園するまで

T・Hの記録



これは、T・Hの家庭で、T・Hの幼稚園をきめて、入園試験をうけ、入園がきまるまでの状況を記録したものです。これから、T・Hがどのようにして幼稚園生活に適應してゆくか、月を追って記録を出してゆく予定です。幼稚園が、子どもの生活にとって、また、家庭にとって、どのようなはたらきをしているかをみていただきたいと思います。

△一、幼稚園をきめるまで▽

T雄は昭和三十一年五月五日生まれ、現在身長一〇七・六センチ
体重一九・〇kgのめったに病気をしない子どもである。幼稚園につ
いて話が具体的になって来たのは、T雄の四才の夏であった。
話題になった幼稚園は次の七つである。

	(通園方法)	(服装)	(宗教関係)
1 A	バスにのって五ツ目でスクールバスにのりかえ。	制服アリ	キリスト教
2 B	バスにのって五ツ目、大抵は近道を歩いて行く。	アリ	キリスト教
3 C	バスにのって三ツ目、大抵はある。	アリ	キリスト教
4 D	バスにのって三ツ目、大抵は歩く。	制服はないが紺色のスモック	仏教
5 E	電車にのり三ツ目で乗換、更に五ツ目	制服アリ	宗教関係ナシ
6 F	バス四ツ目、大抵は近道を歩く。	アリ	宗教関係ナシ
7 G	バス十七分の(起点より終点まで)	制服ナシ	宗教関係ナシ

家から歩いて五分などというような近くには一つもない。近所で親しくしている方達は、A、B、C、Dそれぞれ一人ずつ行っている。

A 幼稚園について

母 「T雄ちゃん。あなたはどこの幼稚園に行きたいの。」

T雄 「Aだな。だってM子ちゃん(隣のお子さん)が行ってるんだもの。」

母 「あそこは規則書には男の子も入れると書いてあるそうだけど、女の子ばかりですって、男の子はいないそうよ。」

T雄 「じゃいやだ。」

B 幼稚園について

毎日、B幼稚園に行っているN子ちゃんが幼稚園から帰るのをまつて一しょに遊んでいる。

N子 「あたしは大天使ガブリエルよ。」

T雄 「僕は守護の天使。」

二人とも頭にいっぱい花をつけて、背中に二本ずつ葉らんをさしている。

N子「ねえ、ねえ、ガブリエル大天使、ガブリエル大天使。」

口を思いきり大きくうごかして『ガブリエル』と発音するのが快いらしく『ガブリエル、ガブリエル』といいながらかけて行く。

とても明るい日ざし。

M子のお母さんに逢った。

M子の母「この頃M子は、寝る前にお祈りするようになったのよ。それがとても利くの。前とちがって来たわよ。」

(このお母さんは、子どもと一しょにお祈りをした事があるのだろうか。感謝とか、よろこびをはなれたお祈りなのだろうか。)

父も、母も教会に行かなくても、せめて子どもはキリストの愛によつてしつけをもらおう、やさしい心を育ててもらおうという親心らしい。その親心は立派だが、ともするとしつけてもらおうことだけがすべてと思ひこむ。これではキリストの教が単にしつけへの道具となつてしまつてはないか。

友人「キリスト教関係の幼稚園も女の子ならいいけど、男の子は可哀そう。」

こういうことばがしばしばきかれるのは、かみくずが落ちてれば拾うとか、花を折らないとかいう目先のしつけがゆきとどいて、男の子の行動に禁止が多いという、うわさからである。

真に宗教的環境で、宗教的情操を育ててくれるのだったら、女の子も男の子もないと思う。そこには愛がみちみちて本当の自由があり、しつけがなされていると思う。「いけません。」といわれなくて

も、紙くずは紙くずかごにごく自然にすてられるだろうし、女の子も男の子もびのびとしてゐるはずである。

T雄も素直な幼児期をそういう雰囲気育てたいとは思ふが、宗教に徹した幼稚園ほど、宗教の本質にふれるような会話が出てくると思う。そうした時に、同じ信仰をもっていない母親は事をどう処理したらいいのだろうか。

知人「この間B幼稚園の母の会で遠足に行くお支度の話があったので『当日雨が降ったらどうしましょう』とうかがったら『必らずお天気になります』っておっしゃるのよ。『でも、万一』という」と『イエズスさまにお祈りしてあるから大丈夫』っておっしゃるの。帰って主人に話したら『バカ!』っていわれちゃった。」

父はバカ!! といつてしまえば事はすむかも知れないが、母はどうしたらいいのだろうか。それ以上に子どもはどう思うだろうか。

T雄も、N子ちゃんにきてきては、天国とか、神様とかかなり突っこんで質問をする。知識だけでは説明しきれない。母に信ずるものがないと、納得のいくようには話してやれない。そして最もよく語りかけるものは母親自身の祈っている姿だと思つている。

私は仏教をよりどころとしている。それなのにT雄をキリスト教関係の幼稚園に入れては頭の中が混乱してしまうだろう。

宗教的情操は今まで通り家庭で育てていこうと思う。そこでB幼稚園、C幼稚園については親からは、積極的に話しかけないことにした。

D 幼稚園について

お寺が幼稚園をやっているというだけで、宗教的雰囲気はなさそうである。女の子が、

「あの人形とって来てみな。」

「ホラーコやる。」

「早くしなよ。」

などということばづかいをきいてみると、もう少しことばに注意してくれる——というよりむしろ、ことばづかに注意している家庭の子どもの集まっているといった方がいいか——幼稚園に入りたいと思う。

アソバセことばは感心しないが、先生も標準語を使ってくださいとありがたい。

E 幼稚園について

父の会社の上役の方のすすめだったが、通園が困難なのでお断りした。

F 幼稚園について

M子の母「M子の行っているA幼稚園はマダムというシャツとした方がいらっしてその下に生徒という感じだけど、F幼稚園は先生と子どもたちがお友達という感じ、『みんないらっしやい』なんどとても気さくだったわよ。」

歩いても行けるので時々垣根の外まで連れて行って中を見せた。

母「どう、この幼稚園と、前にお母さんといったG幼稚園とどっ

ちがいい？」

T雄「こっちは毎日歩いてくるんでしょ。」

幼稚園をきめるまで

—— K の場合 ——

「Kちゃんいくつ」

「四つ」

「じゃあもう幼稚園にいつているの」

「まだ。来年から」

こんな会話がたびたびされるようになると、Kは、「いくつ」とたずねられただけで、「四つ」だけど、幼稚園にはまだいってないの」と答えるようになった。その答には、「もう幼稚園にいつているみたいに大きいでしょう」という気持と、「本当はもう幼稚園にいきたいのだけれど」という気持がふくまれているように思われた。親もそろそろこの幼稚園に入園させるかをはっきりときめなければならなくなってきた。

まず、父の知っている付属の幼稚園は、その内容が立派であり、また、子どもたちのレベルも高いもので、入園出来る出来ないは別として第一に話題となった。しかし、運動会を見学にKを連れていったところ、四十五分以上かかり、Kは、「さで一休みしましょうか」といつて幼稚園でごろりと横になってしまった。これを見るにつけ、また日頃、地域社会に根を生やし、特別な扱いをしないという父の考えにも反するものとして、この園は、第一に話題に上り、第一に選択の

母 「そう、雨がふればバスにのってもいい。」

T雄 「じゃあ僕G幼稚園にする。毎日バスにのれるもの。」

G幼稚園について

T雄 「お母さん、G幼稚園にドングリの木ある？」

母 「エートあるでしょ。この間G幼稚園の先生が『遊園地に散歩に行つて落葉や、ドングリをひろいました。』って本にお書きになったのを読んだ事あるから。」

父 「T雄の幼稚園やっぱりG幼稚園にするか。」

母 「そうねえ」

父 「お母さんはG幼稚園の園長先生が前につとめておられた園で保育とはどういうものか、幼稚園とはこういうものだと教わつて来たんだから、あの幼稚園が一番いいだろう。」

母 「そうなの、それに同級生のKさん。卒業と同時にあの幼稚園におつとめになったのよ。同級生の方が先生だと便利だなんて色々な考えじゃないわ。むしろ子どもがいる前ではことばづかいから気をつけて行かなくてはならないと思つていろいろいいよ。Kさんは学生時代から学究的で真面目な方だからいいかげんな保育をなさるはずがないし。」

あの園長先生とKさんじゃないK先生。T雄を預けるのに安心だわ。」

父 「その安心は大切だよ。」

母 「ただバスで通うのがねえ。」

父 「少々遠くても歩いて通えるところを選ぶか、安心していられ

園外におかれた。従つて、近くの幼稚園のなかからえらぶということとなった。その方針で気をつけていると、母の耳にはいろいろな幼稚園のうわきが入ってきた。

「あそこは、強い子は伸びるけど、気の弱い子は下づみになつて伸びないですよ。」

「先生が熱心だけど、子どもの悪いところをきびしくおっしゃるから親がつらくて。」

「先生はやさしくてとてもいいけど、何となく活気がなくて、あんまり希望者が少ないですって。」

「あそこは営利本位ですって。」

こんなうわきが近くなだけに限りなく入つてきて、だんだん落ち着かなくなつてきた。人の単なるうわきに気をとられず、本当にKに適した幼稚園をえらばねばならないと気づいたのはぼつぼつ募集のはじまる頃だった。客観的に候補に上つた園を比較しようと次頁のような表を作つてみた。

この表の各項目に、よい、普通、困る、の三段階の評価を加えてみた。この結果、頭の中でごちゃごちゃと考えていたものがすつきりと形をととのえてきた。やはり、近くのX幼稚園とY幼稚園が得点が高く同点であった。私どもの家庭がキリスト教であり、その信仰にもとづいてKの教育をしていることを思い、最後にY幼稚園と決定した。実は、十二月にこのクリスマスの祝会を見学した帰り途に、既に母の心ではひそかにそう思つてはいたのであつたが。

る保育を選ぶか。」

母 「別にF幼稚園が安心していられないというわけではないわ。どうい先生方が、どういう保育をなさるのか知らないのよ。」

父 「フン。フン。」

母 「小さい子をバスで通わせる事が許されるなら、私はG幼稚園にしたいの。」

父 「じゃあG幼稚園にしよう。バスにのれるし、ドングリはあるというし、なあT雄。」

お母さんがバスに乗るところまで毎日送るといことにして、G幼稚園にきめた。

△二、入園のための試験日まで▽

一九六一・一・五

T雄 「幼稚園でお勉強するところだってね。N子ちゃんいってたよ。むずかしいお勉強するところだってサ。」

母 「そうかしら、遊ぶのよ。」

T雄 「遊ぶ？ 遊びに行くの？」

父 「そうだな、友だちと遊ぶところだな。一人で遊ぶんじやなくて、T雄ちゃんと同じくらいの大勢のお友達と一しょに遊ぶところだよ。」

一九六一・一・七

T雄 「ぼく幼稚園いっても折り紙なんか出来ないよ、いつもN子ちゃんに手伝ってもらわないとなんにも出来ないんだもの。」

Z 幼稚園		V 幼稚園		W 幼稚園	
歩いて4分。裏通りからゆける。	+1	都電。国電。都電で45分以上	-1	都電20分位	-1
仏教	-1	なし	0	キリスト教	+1
建物は普通。庭はあまり広くない	0	建物は立派。庭も立派	+1	建物は立派。庭は普通	+1
		社会的評価は高い。大学の付属で、小学校、中学校がついている。		すばらしい幼稚園。社会的評価は高い。女子の高校、中学、小学校がついているので女子の方が優勢である。	
お使いの時わきを通して、のぞいてみる。親友が、ここに入園する。自動車のおくりむかえがあるので、憧れている。	+1	遠いので結びつきはない。一年以上前に運動会に行ったときごろりと横になってしまう。	0	いところが一人Wの小学部に行っている。もう一人のKは今年小学部に入った。Kはこれによって、Kのことがうらやましい。Kと三人で遊ぶと、Kはいつも仲間はずれにされると、喜んでついでに歩三幼稚園に入園すると、仲が親密になると思う。このことは勿論よいことであるが一方、身内のみのだけの遊びのグループを作り排他的になるのではないか人形形成上望ましくないし、発展性が無い。	-1
○運動会の練習の時柵の外からそっとみせていただく。きっと運動会の間きわで、いそがしいだろうが、先生方が、こわいかおで、あちこちの子どもを叱って歩いていらっちゃった。母が、夕方いそがしい時叱るのと似ているけれど、あまりよいと思わない。	-1	○先生の存在が保育の中で表面に出ないがそれについて自然に、子ども達が動いている。子ども達の動きをうまくとらえて保育されている。すべてが理想的で子どものレベルも高い。	+1		
K「お寺の幼稚園いきたいな」 母「どうして」 K「あきよしちゃんと毎日あそべるもの」 K「(おくりむかえの白い自動車をみて)あれお寺の幼稚園のだよ。アッ止った。アッ、幼稚園の人が降りたよ」 いつまで立ち止って動かない。	+1		0	見学したことがない。 K「(お手伝いのおばさんに)よしちゃんWに入ったんだよ、すみちゃんもWなんだよ」と得意そうにいう。	0
	+1		+1		0

毎日遊んでいるお子さんが、T雄より二才上なので幼稚園で覚えて来た折紙をつくって遊ぶらしいのだが、T雄はまだ何も出来ないのです。つまらないらしい。

T雄 「幼稚園に行ったらオーバーはどうしたらいいの」

T雄 「幼稚園で紙芝居もしてくださいさるんだってね。僕みたいんだ」

T雄 「もういくつねたら幼稚園のしけん？」

母 「一つ、あしたですよ」

T雄 「おやつは僕もって行くね」

(「試験におやつ持参のこと」と「お知らせ」に書いてあった。)

△三、試験 日▽

○朝

洋服をきかえさせてやりながら、

T雄 「試験で何をやるの」

母 「先生が一しょに遊んでくださるの。それでやってごらんなきいっていわれたら、その通りやるの、まねっこあそびみたいだね」

T雄 「フーン」

母 「何かおききになったらね、お隣りのおばちゃんとお話するよ。うに何でもお話ししていいのよ。オボ(犬の名前)のおばちゃんにいろんなことお話するでしょ。ああいうふう」

	X 幼稚園	評価	Y 幼稚園	評価
通園に危険はないか	歩いて12分。電車通りをわたる	0	バスで2つ目	-1
宗教は何か	なし	0	キリスト教	+1
庭や建物は	建物は普通、庭にしいの木がある	0	建物は普通、庭はあまり広くない	+0
在園児と(単なる聞き客観合的な取り上げだけをしてみる)	先生方が非常に熱心で、子どもをよくみて下さる。しかし母親のやり方を批判されることがある。		先生方がやさしく、誰でも受け入れて下さる、X幼稚園のような熱心さはないが親切である。	
Kと各園との結びつき	いとこが在園中で、運動会の際に招待され、ごほうびをいただきたい。	+1	日曜学校へ行っているので、2,3人の友人がある。先生方も親しい。	+1
見学してみた	先生方が飾り気がなく、いわゆる幼稚園らしいやさしさがなくかえってさっぱりして気持がよい。先生方が、全員を指揮して、大きな声であと片付けをさせるのがちょっと気になる。Kには必要なことと思う。展覧会は、一人ひとりの子どもにたくさんの記録があり、いかによく観察されているかわかる。	+1	○クリスマスの時参観させていた。全園児が50人位で、輪を作り、その中で、3,4人ずつ立って、普段やっているおゆうぎをしたり、合奏をしたり、とても家庭的、何よりも人に見せるための無理がなく、好感ももてる。	+1
Kの感想 (11月頃自発的に言ったことば)	K「X幼稚園はいいな」 母「どうして」 K「よしちゃんがいるもの」 (いとこ) 母「でもKちゃんが入るころは、卒業しちゃうのよ」 K「X幼稚園は、しいのきがあるからばくすきさ」 母「そうねえ」	+1	K「Y幼稚園いいね」 母「そうねえ」 K「だって日曜学校でカードくれるもの」	+1
総合点		+3		+3

Kは、入園試験も受けないうちから、「ぼく、Y幼稚園いくんだよ」とたのしみにしている。

(母親F)

よい——+—
普通—— 0
困る——-1

ハンカチをポケットに入れてやると急に大きな声で、

T雄 「三丁目三十四番地の九！ あっいえたいえた。ふしぎだなあ、今までいえなかったのにいえた。」

(近所の方にしげんの問題には番地をきかれると教えられて来たらしい。最近番地が改正になったのでスラストラといえず、内心気にしていたのだろう。)

ちょうど、T雄の妹が風邪で寝ているため、母はつきそって行かない。

ミカンとクッキーズの入ったバスケットを下げて、父と一しょに出かけて行つた。

(試験場のようすは、父親の記録による。)

○試験場で。

試験場の控室に講堂があてがわれた。三か所にいろいろな絵本が置いてあつた。

T雄 「お父さん、ぼく本みる。えーとこれがいいよ。」

乗りものの絵本を取り出す。父はすこし離れたストープの側でみている。

T雄 「お父さん『きんば、きんば』ってなに。」

ケーブルカーの絵を指してきく。

父 「それは『ば』かな。T雄の一番よく知っている字じゃないかな。」

T雄 「あつ、『ば』だね。『きんば、きんば』ってなに。」

父 「そのケーブルカーの名まえさ。」

(父は金波、銀波の説明は抽象的であり、またT雄は金波銀波というふうになぶさらしい情景を経験したこともないので、このように答えた。T雄は次の絵がおもしろいらしくこの答えでなっとくした。)

T雄 「お父さん、おしっこ。」

父は一しょに便所へ行く。ちょうど一人の子が母親に手伝ってもらつている。

T雄 「ぼくは一人でできるんだ。」

控室にもどると、ちょうど女子学生が受験者の番号をよびに来た。

T雄 「お父さん、ぼくの番、まだ。」

父 「T雄はなん番だ。」

T雄の胸に番号がついている。

T雄 「三九^{えんじゅう}ばん」

父 「三十九番というんだよ。まだだから本をみておいで。番がきたらおしえてあげるから。」

父がストープの側にいるので、T雄もやってきた。運動場をみて、

T雄 「いろんなものがあるね。ぼくここにきたかったんだ。」

父 「まだ試験はすんでいないんだから T雄が入れるかわからないだよ。いっしょうけんめいやれば入れて、毎日ここで遊べるね。」

女子学生がよびに来た。T雄もその中に入っていた。

父 「さあ、T雄、番だよ。しっかりやるんだぞ。」

T雄 「うん。」

教室の前で父はもう一度いう。

父 「今朝おかあさんが『オボ（犬の名前）のおばさんとお話する
ような気持ちで話してたね。ふつうの気持ちになっているんだよ。』

第一室

T雄は笑って教室に入ってしまった。戸をしめられている中で
の話はわからないが、グループでジャンケンをする。時々こちらを
向いて笑って手をあげて合図をする。父は気楽にさせる意味で合図
にこたえる。かごにボールを入れるゲームをしてT雄は一個うまく
入った。得意そうにこちらを見て合図をした。父は、あまりT雄に
父を意識させてはいけないと思い、T雄に背中を向けて運動場を見
た。

第二室

T雄は男の子、女の子といすにこしかけてテストを待っている三
人でさかんに話をしている。ポケットからハンカチを二枚出して何
かいている。T雄と男の子がよばれて先生の前にすわる。二人の
子の間にはボール紙で小さなついたてがしてある。座ってから、
二人でちょっとふざけていた。しかし先生が積木でサンプルを作り
はじめると、T雄はじつと先生の手もとを注目した。

（そのじいっと見ている目は、いままで家庭では見かけたことのない
真剣さをもっていた。）

二度目を作った時、自分ができる隣の子に話しかけている。

第三室

第三室では絵をかかされた。隣の子はすぐ描きはじめる。T雄は
何を描こうかとまよっているふうであった。時々父の方を見て照れ
たような笑顔ををする。グリーンのクレヨンを手にもって、父の方へ
「これでいい」というような顔をした。父は何でも好きに描けばい
いんだ、という気持ちでうなずいてみせた。（あとは背中を向けて、
運動場をみる。）

やがてT雄は出てきた。

父 「ごくろうさん。元気にできたようだね。」

T雄 「ぼく絵がかけないんだよ。」

（父はこのことには答えなかった。）

父 「さあ、こんどは先生とお話をするんだ。」

T雄 「お父さん、ぼく遊んできていい。」

面接室の前にはたくさん並んでいるので、待ちくたびれたT雄が
きいた。

父 「もうすぐだから、待っていなさい。」

T雄はだんだん落着かなくなり、柱にぶらさがって、ぐるぐるまわ
りだした。（父は遊ばせて気持をスカッとさせた方がよいと思った。）
父 「T雄、じゃあすべり台で遊んどいで。よんだらすぐくるんだ
よ。」

T雄 「うん！」

T雄はすべり台ですべて帰って来た。

父 「もういいの。」

T雄 「また、あとでする。」

この時、女子学生が身体検査の室へつれていった。

T雄 「お父さん注射するの。」

父 「注射はしないよ。ほら、どこにも注射器がないだろう。」

奥で口腔検査をしている医者を指しながらT雄は気の弱い顔をしていった。

T雄 「ぼく、あれをするとはいちゃうの。あれ、きらいなんだ。」

父 「だいじょうぶさ。平気でアーンと口をあけていけば、はかないよ。のどに力を入れていけるからいけないんだよ。」

T雄は服をぬいで身長、体重を計ってもらい、例の口腔検査を待つために並んだ。さっきいっしょにテストを受けた男の子と、また

いっしょになった。

男の子 「お母さん、注射するの。」

男の子は不安そうに母親に甘えた。

母親 「いいえ、注射なんかしませんよ。」

男の子は、まだ安心しない。

T雄の父 「ほんとうに注射はしないよ。口の中を見てるだけだよ。」

T雄 「そうだよ注射なんかしないよ。注射なんか、したって痛くないよ。ぼく、はじめちょっと痛いけど、目をつぶっていると痛くないんだ。ねえお父さん。」

(T雄は、やはり注射に対する不安があるために、その不安を打ち

けそうとして、さかんに注射をしないこと、注射を受ける時どうすれば痛くないかを説明した。男の子は、つられて聞いていたが、T雄が注射々々というのでまた不安になってきたらしい。)

男の子 「いやだよ。」

T雄の父 「T雄、そんなに注射々々っていうと、こわくなるからやめなさい。」

まわりの人が笑ったのでT雄もバツ悪そうにやめた。それから、

一生懸命、口腔をしらべる医師の方を見ている。列が進んで前へ出る時、小きぎみにバツと進む。緊張をしている感じがよくわかる。

やがて、T雄の番となった。T雄は助手の先生から「いいからだをしていきますね。」と気持をほぐすことばをかけられたので、照れた顔

をした。不安でワーツといたいところかも知れない。緊張しながらも威勢よくこしかけた。

T雄 「あーん」

T雄 「あーん」

医師がなにもしないうちから勢よく口をあけた。顔が赤くなり泣き笑いのような顔である。(T雄は緊張が続くとよくこんな顔をする。親が甘いことばをかけると泣くことがある。励ますと逆に笑い出す、そういう時の顔であった。)

医師 「そんなに緊張しなくていいんだよ。」

(T雄があまり突拍子なく威勢がよかったので医師は笑いながらいった。まわりの人も笑った。T雄は、すぐすんだのでホツとした表情にもどった。)

T雄 「お父さん、へいきだったよ。」

T雄 「お父さん、へいきだったよ。」

父 「よかったね。痛くなかったろ。」

T雄 「うん。へいきだよ。」

また面接室の前にならんた。

T雄 「お父さん、ぼくあの貝がらみたいなので遊んできていい。」

運動場の左隅にある抽象形態を組み合わせたような遊び道具を指していった。父は、緊張をほぐすために許した。

T雄は、一つの階段を上ったが、上が球状になっていて、うまくまわって上に出れない。いろいろためしていたが、一度おりて裏がわからあがりはじめた。しかし、やはり同じ場所で止ってくふうしていたが、うまくいけない様子だった。あきらめて下において父のところへかけてきた。

父 「どうだった。あそべたかい。」

T雄 「ぼく、あの遊びかたわからないんだ。こんど、ブランコやっこきていい。」

父 「もうすぐだから、よんだらすぐくるんだよ。」

T雄は、ブランコとすべり台で満足して遊んでいたが、順番が来たのでよんだ。

父 「さあ、これがすむと、もうおしまいだ。しっかりやるんだよ。」

T雄 「ちゃんとやるからガム買ってよ。」

父 「そんないい方、お父さんはいやだな。何か買ってもらえるならちゃんとする、もらえないならしない、というのはよくないことだよ。T雄はここの幼稚園に入りたいたいから試験を受けに来たんだろ。それだったら、一生懸命試験を受けなきゃ入れないじゃ

ないか。」

T雄 「ハイ。」

(T雄は打算的な気持でいったのではなく、気持のはずみでいったのだろうが、こういうことばでも見のがしておく、習性化してくる恐れがあるので、こんな場合注意することになっている。)

先生 「T雄ちゃんは、今日お父さんと来たのね。」

T雄 「お父さんがようじででられないから。」

先生 「そう。朝なにのって来ましたか。」

T雄 「タクシー。」

先生 「それはよかったわね。T雄ちゃんは妹さんがいますね。なんというお名前。」

T雄 「○○○とみ子といいます。」(この返事だけ、いわゆる面接の応答口調で答える。)

先生 「T雄ちゃんは、とみ子ちゃんを遊んであげますか。」

T雄 「とみ子、かぜをひいてるでしょう。だから外に行けないから遊んであげるけど、時々いじわるしちゃうんだ。」

先生 「それはよくないお兄さんね。T雄ちゃんはおもちゃをもっていきますか。」

T雄 「自動車のおもちゃがあるんだけどもうみんなこわれているの。」

先生 「一生懸命遊んだからでしょ。ハイ、こっちへいらっしゃい。」
胸の番号札の下に、先生からチェックをもらって、室から出た。

父 「さあ、これでもうみんなすんだよ。よかったね。」

(婦りの用意をして外に出た。)

父 「T雄、つかれたかい。」

T雄 「へいきだよ。だけど、ぼく、はいれるかしら。」

父 「だいじょうぶさ。」

バスを待つて乗る。

父 「T雄、幼稚園に入ったら、毎日バスに乗って通うんだけど、

一人で乗れるかな。」

T雄 「多摩川園前からは、一つしかないでしょう。だからわかるけ

ど、かえりはバスがたくさんあるからわからないね。」(実際には

二つ三つ出ている)

父 「じゃあ、先生に乗せていただく?。」

(しばらく考えて)

T雄 「アツ、こうすればいいよ。お父さんが多摩川園前って字を紙

に書いてくれたら、それを見て同じ字のバスに乗ればいいでし

よ。お父さん書いてよ。」

父 「そうだね。じゃあ、書いてあげようね。だけど、車掌さんに

もよく聞くんだよ。」

バスが走っている間、T雄は運転手の動作に見とれていた。T雄

はバスで通うのが楽しみらしい。多摩川園について。

父 「T雄、このふみきりがチンチンと鳴っているときは、どん

なことがあっても待つているんだよ。鳴らなくなったら、渡って

T雄 「急に渡ると電車にはねられるもんね。」

父 「さっき、絵を描くときなかなか描けなかったね。あとで何を

描いたの。」

T雄 「時計かいたの。だけどよく描けなかったんだ。なにを描いて

いいか、わからないんだもん。」

父 「そう。何でも好きなものを描けばいいんだけどな。こんどお

父さんがスケッチに行くとき、つれて行ってあげようね。いっし

よに描こうよ。」

T雄 「わー、うれしいな。」

父 「積木のとき、隣の子と話してたろ。お話しちゃいけないんだ

ぞ。」

T雄 「隣の子ができないから教えてやったんだよ。ぼくがいても

へんなことしてたよ。」

父 「先生がちがう問題をだしたんだよ。きつと。」

父 「チューインガムを買ってあげるよ。こっちの道を行こう。」

T雄 「わー、うれしいな。奥田さんのところに売ってるよ。とみ子

に見せるとほしがるから、ぼくそっと持つてるよ。」

父 「とみ子は、病気だからね。」

T雄 「とみ子は、のんじゃうといけないからね。」

T雄は坂道をのぼって、家が見えると「お母さんに話してあげよ

う。」といっかけてかけた。

(試験も、比較的楽な気持で受けられたと考える。)

○試験から帰って

母 「どうだった。」

T雄 「試験おもしろかったよ。キシヤポッポやったんだ。ジャンケンで運転手と車掌ときめたの。」

母 「T雄ちゃんは。」

T雄 「車掌！」

母 「T雄ちゃんのお友達いっぱいいたでしょ。」

T雄 「ウン。お母さんが一しょじゃないって泣いてた子いたよ。」
(あんまりしつこくきいてもいけないと思つて私からはきかなかつた。お食事の時などに少しづつ思い出しては話していった。)

○試験結果発表の前夜

T雄 「幼稚園に入れるかな。」

T雄 「どうして入れたか入れないかわかるの。」

母 「『この幼稚園に入ってもいい人の名前』、って紙に書いてはつてあるんじゃないかしら、お母さんの小さい時そうだったわ。」

T雄 「名前が書いてなかつたらどうするの。」

母 「その人はおっこっちゃったのよ。」

(内心しまつたと思つたがもうおそい)

T雄 「おっこちるって……、上から？」

母 「その幼稚園へは入れないということ。」

T雄 「ぼくの名前出てるかなあー。」

新入園児を迎えるにあたって

幼稚園へはいることにきまつてから四月の入園式まで、子どもたちにとっては幼いながら期待や不安さまざまな想いにみだされる日であろう。親のなかには子どもに何かさせておかなければならないような気がして落ちつけない親もいるかも知れない。幼稚園でも先生たちは今度はいってくるのはどんな子どもたちだろうか、どんなことをしておいたら子どもたちが楽しく毎日をすごしてくれるだろうかといろいろ考えていることであろう。はいってくる子どもたちとその親、うけいれる幼稚園と先生たち、どちらにも準備が必要である。ここでは幼稚園として新しい子どもたちを迎えるについてどのようなことを考えておくか気づいた点を二、三あげておきたいと思う。

(1) 新入園児保護者会
幼稚園としては、子どもたちが幼稚園生活の規則正しさに早くなれるよう、家庭でもおきる時間ねる時間に注意するとか、自分でできることは自分でさせるなど入園前の準備として考えてほしいと思う。まとまつた形のある絵をかけるようになつてほしいとか、自分の名前をかけるようになってほしいなどとは決して要求しないし、また、幼稚園でおりこうにしていくように、家で子どもにもいい聞かせてほしいなども思わない。生地のままでもいい。幼稚園に来てみて、「いいなあ」と子どももころに感激をもつて新しい生活にどけこんでくれることを願つていよう。幼稚園のうけいれ準備と家庭での準備とがくい違つて、子どもが失望したり、ひどく緊張したりするようになつてはかわいそうである。幼稚園とはどんなところか、を親に知つてもらつたために、新入園児保護者会を計画している。それは幼稚園の教育方針というような大きなこととはもちろん、毎日の生活がどのようであるか、また持ち物やその他こまかいことも含めて親に知ってもらい、保護者心得などよく目を通して、



つたのみ日記 (その一)

坂元 彦太郎

はしがきとして――

お茶の水の附属幼稚園の園舎の外かべには、つたの葉がまつわりついていることは、一ぺんでも訪れた方には印象に深く残っているであろう、と思われる。夏の新緑も美しいが、秋の紅葉はいっそう美しい。それが、園内の多くの常緑樹や花々とうつり合って、ほんとうに楽園のような空気をかもしだしている。

一昨年のこと、アメリカカシロヒトリという害虫がはびこって、またたく間に、このつたの葉をすっかり丸坊主にしてしまった。まだ九月のうちであったが、つたの樹をいとはしく思っ近づいて見ると、まだ緑色をした小さなつぶの実があちこちにしっかりと幹や枝にしがみついていた。昨年秋も、つたの葉が美しく紅葉した。その葉をめくって見ると、やはりあち

こちにしなびたような小さな実のかたまりがひそかに存在を保っているのがあった。

すっかり落葉してから、私はむき出しになっている、むらさき色のつぶつぶのかたまりを、庭にでるたびに眺めたり、さわって見たりした。ひとびとがほとんど見向きもしないであろう、小さないのちのかたまりに、何ともいえない愛情を私はもつようになった。

陽にあたったり、霜におそわれたりしたせいであろうか、年を越すと、つたのみのかたまりは、やせてしなびこけてしまった。しかし、それでも、はつきりとつたの実はのこっていた。

そして、よく見ると、昨年の実だけでなく、一昨年の実も、その前の実も、いっそうやせてこけてしまつて、人間なら反ばかりになつてはいるが、その年令の古さがうかが

われるような仕方、枝にしがみついているのであった。わたしは、それに決して意地汚なきを感じはしなかった。生の執着と、いったものよりも、ひそやかにかくれて、しずかに生きづいていく永遠につづくいのち、それも決して盲目的であつたり、誇らしげであつたりするのではなく、ひっそりと、つつましくやかに生き抜いている姿を感じとつたのである。

そして、全く論理的にはひどい飛躍なのであるが、これがそのまま、この幼稚園のすがたであり、あるいはまた、私自身の生きてきた道であり、あるいは、幼児教育の歴史のどこかを象徴しているものであるかのような、感じを私はもつてしまったのである。

つたの実みたいに、ささやかなるに足らないものであるかも知れないが、それなりにひそやかにいきづいていくいのち――幼児教育もそういうものであり、そして、そういうものとして、これから、いつまでか知らないが、つたの実のように、考えたことを書き残していつて見よう、と私は、いま思っているのである。

キリスト教幼稚園の現状



武南高志

一口にキリスト教幼稚園といっても、

その内容は幾通りかに分類することができ
る。昨年五月一日現在文部省調査によるわ
が国の幼稚園数七二〇六のうち、私立は四
五九八という数字が示されているが、その
中でキリスト教幼稚園がどの位あるか。

全国私立学校審議会調査による昨年十一
月一日現在では私立幼稚園が四六三一とな
っているが、設置者別によると宗教法人の
設置によるものが一二三二である。キリス
ト教幼稚園もこの中に包含されているはず
であるが、仏教その他を入れるとこの数字
は少なすぎる。これは宗教法人の代表者が
個人名義で設置している場合もあり、また

直接宗教法人と関係はないが、信徒が設置
している場合もあるから、宗教関係の設置
する幼稚園は、はるかにその数字を上廻る
とみてよい。

三十六年度のキリスト教年鑑によると、
カトリック教会に関係するもの三三〇、プ
ロテスタント教会に関係するもの七四二と
なっているが、これは余り違わない数字で
あろう。カトリック教会のことはよく知ら
ないので、しばらくおいて、後者についての
内容は(一)教会が直接に経営する教会附属幼
稚園、(二)教会堂または構内地の一部または
全部として使用してはいるが教会直接の経
営でない園、(三)キリスト教主義学校に併設

されている園、(四)信徒が独力でまたは学校
法人として経営していてキリスト教幼稚園
と呼んでいるもの、等に分けることができ
る。そしてこれらを含めて一般には、これ
らをキリスト教関係幼稚園と呼んでいる。

そこで前述の七四二のプロテスタント教
会の幼稚園の中で、私どもの属している日
本基督教団所属の幼稚園は大体四〇〇あ
る。(昭和三十四年五月現在三八九)これ
は教会が直接経営している園で、私どもは
これを教会幼稚園といっておるが、それら
の園については教団の教育委員会が毎年そ
の実態調査をしているので、ある程度の状
況を知ることができるから、その概略をこ
こに掲げて、わが国のキリスト教幼稚園の
現状を推測していただきたい。(日本基督
教団のほかに、ルーテル教会、聖公会、バ
プテスト教会などそれぞれ相当数の幼稚園
がある。)

まず園の全国的分布状態は、東京の七三

を最高として、神奈川、兵庫各二八、埼玉一四、福岡、大阪各二三、京都一二、広島、長野、愛知各一一、宮城、福島、愛媛各一〇、その他一〇以下ではあるが、各県にわたって存在している。

これら三八九の園のうち報告のあった三六〇についてみると、三十四年五月一日現在（以下同じ）の園児数は三〇、五六七人であるから、一園平均は八二人になる。それは園の規模を察することができる。なおこのことは一園の学級数をみれば、なおそれが明らかにされる。

園数	5
80	114
52	34
10	4
4	3
87	389

学級数	1	2	3	4	5	6	7	8
未詳計								

すなわち、最も多いのは三学級の二一四、それに次いで二学級の八〇ということになっていて、大体収容人員一〇〇人前後の園がなかば以上であるといえる。

そしてその保育に当たっている教師は、教諭九六三人、助教諭二三七人、合計二二〇人である。助教諭がなお相当数あるのは、ある地方においては教諭を得ることに困難を感じていることを物語るし、またそれには経営上から来る問題も含まれている。しかしそれはともかく、一二〇〇人の教員が前記の幼児の保育に当たっていることを、数字の上からだけで判断すると、一人の教員が約二五人の幼児を担当していることになる。

この教諭の給料ほどの程度であるか、その概況は次の通り（但しこの数字は一園における平均額を出したもの）

園数	3
10	41
79	72
52	21
21	4
4	1
106	389
金額	
4000円	
5000~5900	
6000~6900	
7000~7900	
8000~8900	
9000~9900	
10000	
11000	
13000	
未詳計	

これをさらにこまかく挙げると八〇〇〇円の三五園を最高とし、次いで七〇〇〇円二八、七五〇〇円と六〇〇〇円が各一八、九〇〇〇円が一七、八五〇〇円が一、六五〇〇円が一となり、その中は四〇〇〇円から一三、〇〇〇円となっている。（ちなみに私立学校共済組合調査による、三五年七月末の幼稚園教諭の標準給与平均額は七八四九円）

なお助教諭の給料は

園数	2
5	15
51	49
22	6
3	1
金額	
2000円	
3000	
4000	
5000	
6000	
7000	
8000	
9000	
10000	

となり、六〇〇〇円の三二を最多数として、五〇〇〇円の二三、五五〇〇円の二三、六五〇〇円の一二、七〇〇〇円の一となり、ついでに、園長の給料については、一八

八園しか報告されていないが、それによる

金額	園数
1000円以下	2
1000	7
2000	9
3000	15
4000	16
5000	41
6000	11
7000	13
8000	21
9000	17
10000	24
15000	7
20000	4
25000	1

を示している。これは園長の殆んどが牧師などの教職の兼任であるため、参報酬または極めて少額をそれに当てているというのが実情である。

そこでこれらの支出に充当する資源は、その大部分が保育料であるが、それについては次のような状況である。

保育料	園数
200円	1
300円台	7
400円台	32
500円台	54
600円台	90
700円台	58
800	68
900	14
1000	23
1200	1

すなわち六〇〇円の七〇園が最も多く、それに次いで八〇〇円の六一、七〇〇円の五二、五〇〇円の四〇、四〇〇円及び一〇〇円の各二三である。

入園料は五〇〇円が一〇二園、次いで一〇〇〇円が七四、三〇〇円が三七、一五〇〇円と二〇〇〇円が各一四の順で、最低一〇〇円(甲)から最高三〇〇〇円(乙)となっている。

このほか教材費は一〇〇円が一二園、五〇円が八三、一五〇円が三四、二〇〇円が二三となっていて、最低二〇円(乙)最高四〇〇円(丁)である。

また母の会(P.T.A)費は、五〇円の一六園が最も多く、次いで一〇〇円の一四園でこれも最低一〇円(三)から最高二五〇円(丁)である。

次に施設については、どのようなであるか。まず園舎の広さは

坪数	園数
50坪以下	72
51~100	205
101~150	58
151~200	10
201以上	1
未詳計	38
	389

となっていて、五一~一〇〇坪のものがその過半を占めている。そしてこれらが専用園舎を有するもの一〇九、会堂などを兼用しているもの一九〇、園舎を有しているがなお不足するので会堂など一部使用しているものが四九であって、ここに施設設備の上、いろいろな問題をもっている。

園地の広さについては次の通り。

坪数	園数
100坪以内	11
101~200	92
201~300	123
301~400	49
401~500	42
501~1000	6
1000以上	8
未詳計	28
	389

ここでも二〇一〜三〇〇坪、及び一〇一〜二〇〇坪がこの過半を占め、その殆んどが教会の構内地の兼用である。これらの施設内容をみても、初めに述べたように一〇〇人内外の収容人員の規模であることが示されている。

以上でその状況を数字の上からみたのであるが、次にそのキリスト教幼稚園の特色とするところは何か、またどういふ点に特色を出そうとしているかについて一言加えると、これらが一般の幼稚園として存在する点は何ら異るところはないが、それに加えてキリスト教において人格の形成を企図しようとの努力を払っている。すなわち宗教教育——これを限定してキリスト教教育、または教会教育という——をしようとするのである。しかしそれにしても、その実際的方法は必ずしも同じではない。朝の会集を礼拝としているもの、教会学校との連関においてその行事に参加させるもの、

極く軽く宗教的のものを加えているものなどさまざまあるが、要はその教育に当る者が、その信仰からかもし出すふん囲気によって保育をするというにある。

次に経営については、教会附属の場合には、教会の役員会などがその衝に当る、または牧師などにその経営をまかされている場合は、役員会または総会に報告する義務があつて、個人の専断は許されない。

最後に、以上のような現況により、現在包蔵している問題を二、三挙げておこう。

(一) 設置基準に対しては、既設のものは指示された程度までに引き上げることが、到底不可能といつてよいほどの困難が伴っている。それは資力の上からでも、また園舎園地の拡張の余地が極めて乏しいという点からもいわれることである。

(二) 学校法人化に対しては、その施設の充実に難点があることは、前述の通りであ

るが、もしそれがかなえられたとしても、そのために経営の主体性が移動することが、果して今後の教会教育にとってどういふ影響があるか、進歩か退歩か、この点にふみ切れないものをもっている。

(三) 最近、問題となつて来た人件費その他の財的措置について、現在の教会は教会自体がこれに十分の援助を与えるまでに至っていない。ここに経営上の困難をどのように押し切つてゆくか、すなわち教育面に無理をしない経営をしてゆこうとする反面の経済的困難をどのように処理してゆくかというにある。



幼児の集団あそびの指導（Ⅱ）



久富御治代

集団あそびの選択

前号で述べた子どもの集団あそびの実態調査及び観察記録の結果、子どもに遊びを充分に楽しませ、教育的保育効果を挙げるためには、まず遊びの選択を計画的に考慮する必要がある。即ち、次のようなことに留意する。

(1) 年齢を考慮して選ぶこと。

年長児は、ややルールのこみ入って運動量の多い競争あそびや記憶、推理などを必要とする知的なあそびを好み、年少になるほど、単純な社交あそびをくりかえすことや、簡単なルールの鬼ごっこのようなものを好んでいる。このことから、年長児では、あまり簡単なものをくりかえしてすると興味を失ってしまうから、何らかの変化、工夫が必要となってくる。また、年少児では、むずかしすぎる遊びをさせる傾向があり、そのため集中できなかつ

(2) 保育期間を考慮して選ぶこと。

四月入園当初には、自由あそびの時などに古くから親しまれてきたり、抑圧的な逆効果をまねくらいがみられる。年少児にふさわしい簡単な遊びも、是非考案してゆかなければならないと思ふ。後に記す「ちようちよ、すずめ」と「動物園」は共に社交あそびであるが、前者を年少児向けに、後者を年長児向けに作ったものである。とくに、年少児の場合、教師と子どもの問答形式を入れて遊びやすく工夫してみた。

四月入園当初には、自由あそびの時などに古くから親しまれてきたり、抑圧的な逆効果をまねくらいがみられる。年少児にふさわしい簡単な郷土あそびをとりいれ、子どもがはやく先生や友だちと仲よくなれるように考慮する。園になれるに従い、簡単な社交あそびや感覚あそび、鬼ごっこなどを加えてゆく。そして、二期になるとゲームあそび、知的なあそびを加え、更に三学期に入り、先生と子どもで、あそびを創作したりすれば興味は一層深まってゆく。「七匹の子山羊」のあそびは、自由あそびの時の子ど

ものごっこ遊びからヒントを得て作ったもので、年長、年少児共
によるこんで遊ばれている。

(3) 子どもの状態を考慮して選ぶこと。

子どもの活動は、その日の天候や気分などによく影響される。

また、一日の保育の流れのどこに集団あそびをもつてくるかによ
って、子どもの遊びへの興味はことなってくる。晴れた日に思い

ちょうちょ すずめ (社交あそび 年少児)

1. ひら ひら ちょう ちょ ひら ひら ちょう ちょ
2. ちん ちん すず すめ ちん ちん すず すめ

だ れ の お は な に と ま り ま し ょ
だ れ の お お や ね に と ま り ま し ょ

○ ○ さん の お は な に と ま た た
○ ○ さん の お や ね に と ま た た

自由な場所にすわり 一人だけ立つ

ひらひら ちょうちょ ひらひら ちょうちょ だれのおはなに とまりましょ

座った子はすきな花になってゆれる

立った子はちょうちょになり自由にとび最後に好きなお花にとまる

○ ○ さんのおはなに とまった

先生がとまれた花の子の名前を歌ってあげる

なればば 先生と子どもと一しょに歌う

とまれた子どもが次のちょうちょになる

動物園 (社交あそび 年長児)

どうぶつ えんの ぞう さん
みなさん ようこそ こん にち わ
なかよく いっしょに あそんだら
くるくる まわって かわりましょ

一重円になり一人中央に入る。

どうぶつえんのぞうさん

みなさんようこそ こんにちは

なかよく いっしょにあそんだら

くるくる まわってかわりましょ

前奏

円周の子は連手、右まわり、
リーダー、円周の子、共に右手、左手を前に出し一礼する。
リーダーは動物の動きを自由にする。
円周の子はその場でリーダーの模倣をする。
リーダーは円周をまわり次のリーダーを選ぶ。
円周の子は拍手、
新しいリーダーが円中央に入る。

きり戸外で遊んだあとは、静かなものがよく、雨の日などは、室
内で充分活動できる運動量の多いものや、ゲームあそびが適して
いる。また食後や午睡後には静かな遊び、集中して作業をした
り、お話をきいたりしたあとには活動的なもの、というように、
動と静、緊張と弛緩のリズムにのった計画がのぞまれる。

遊びの指導

(1) 全般的な指導

④ 遊びの継続
時間、組み合わせ
を考慮すること。

楽しい遊び
も、あまり長時
間にわたると興
味を失ってゆ
く。また、興味が
あるからといっ
て好むままに遊
ばせることは、
疲労の面から望
ましいことでは
ない。

年齢によってその差はあるが、二、三十分までが適当であ
る。さらに、同じ遊びの継続でなく、いろいろの機能をもった遊
びを組み合わせ、変化をもたせることも大切である。そして、遊
びの間に、または後に、適当な休息時間を忘れぬように留意しな
ければならない。

⑥ きまりを正しく理解させ、まもらせるようにする。

七匹のこやぎ(競技あそび 鬼ごっこ)

- | | |
|---------------------|---------------|
| 1. --- おててをみせてくださいな | いえいえこれはちがいます |
| 2. --- あしをみせてくださいな | いえいえこれはちがいます |
| 3. --- てあしをみせてくださいな | こんどはほんとのおかあさん |

子やぎと狼にわかれ問答しながらあそぶ。三番の最後に鬼ごっこになり、狼は子やぎをつかまえる。(遊びの詳細は略す)

集団あそびには、それぞれに遊びの型、ルールがあり、それを
守って遊ぶところにおもしろさがあるのであるから、まず子ども
がそれを理解するように指導することが第一である。まだ遊びに
なれない時には、教師が中心になり、よく話し合い、全員に理解
されてから遊びは始める。また、子どもはなれてしまうと惰性に
流れ、ルールを乱したりするので、話し合いは時々する必要があ

る。とくにゲーム的な遊びの場合は、いつも教師が審判の後にまわらず、時には子ども同士でさせるのもよい。きまりを守ることの大切さや責任感、協力的態度など、自分の役割を通して理解してゆくよい機会となるのである。

◎ みんなの子どもが楽しく参加できるようにする。

子どもの中には、いろいろのタイプの子がいるが、できるだけ全員がよろこんで遊ぶように指導しなければならない。遊びによつては、ひとりまたは数人が出て、他は見ている遊びものも多い。子どもは概してリーダーになりたがるが、その選択はなるべく子ども同士でさせるのがよい。しかし、ともすれば子どもの選択はかたよるので、その時には教師が子どもの仲間入りをして、公平になるようにすることが必要である。

(2) 個々の子どもの指導

先に述べた子どもの遊びへの参加態度から、その指導法をまとめてみる。

④ よいリーダーシップのある子ども

その子自身としては、とりあげて問題にすることはなく、むしろその他の子どものよい誘導者、友だちとなって全体の遊びを上手に進めてゆくように、その長所をさらにのばしてゆくようにする。しかし、いつもその子が中心になることなく、全体の中で自分を生かすように指導してゆく必要がある。

⑤ 追従的な子ども

あそびになれるにしたがい、すすんで遊びに参加しようとすることができるから、次第にリーダーの位置にもつけるよう、励ましながら指導してゆく。そして機会をみつけ賞讃することも大切である。一度そのような経験をして先生や友だちに認められると、自信をもつて遊ぶことができ、やがてよいリーダーシップをもつようになる。

◎ 独占的な子ども

年少児では遊びにあきたり、集中することができないなどの理由で、自分勝手な行動をする場合があるが、年長になるにつれて、みんなに注目され、承認されたいことから、ルールを乱したり遊びを独占したりすることが多い。であるから、その不適応な行爲を叱るのみでなく、上手に遊びに参加した時には友だちと共にほめてあげるようにする。また、先に述べたゲームの審判などをさせるのも効果がある。そして、集団あそびの時だけでなく、自由あそびの時や、他の保育活動の場でも、先生のお手伝いをさせて責任をもたせたり、友だちの世話をさせたりするよう平素の指導が必要である。

④ 見たのしむ子ども

無理にさせようとしないで、まず見ることを充分楽しむ段階をふめば、次第に自分から参加してくるものである。無理にさせようと教師があせると、かえって遊びそのものをいやがるようになる。また、ひとりだけが皆の前でするような場をさけ、全員が同

母親の養育態度が子どもにおよぼす影響

——幼稚園でいろいろな問題を示した事例を中心に——

権 平 俊 子

前号において、吃音児の事例を中心に、母親自身の問題が子どもの養育にいかにか影響するかについていくらかの考察を加えてみた。本号では、幼稚園でいろいろな問題を示した事例をあげ、母親と子どもの関係、並びに幼稚園での問題につき、考えていきたいと思う。

一、事 例

Y・K 四才八か月 男児

(相談に来所した動機)

幼稚園に昭和三十四年四月に二年保育で入園したが、入園当初より全く団体生活をしないで、ひとり勝ち行動をしている。受持教師が心配し、知人の心理学の大学教授に相談したところ、教授より筆者に相談するよういわれた。そこで受持教師が相談してくるようにすすめて、昭和三十四年六月二十六日に母親がY・Kをともなって来所した。しかし、当日、筆者の時間があいていなかったため、翌日、再び来所するように依頼した。母親はこれより以前、昭

和三十二年十一月十三日本児三才一か月の時に下の子ができて嫉妬、友達についてという主訴で当所に来所し、他の相談員が担当している。(筆者の手落ちで、再来かを問わなかったため、これを母親が語ったのは母親との面接第四回であった。)

(問題)

幼稚園で団体行動をとらず、皆んががお祈りをしているとき、ひとりで園長の壇に上つてみたり、奇声を発したり、先生の悪口をいう。遊戯や歌のときも同様である。昼食の時も歩きまわって、殆んど食べない。友達の上被りを缺で切つたり、黒板のチョークを全部折つたり、砂場の砂に水を入れたりする。しかし、ひとりで何かつくっているようなときは、集注時間は長くつづき、作品も立派なので、知能の発達はおくれないようだ、と受持教師はみている。

家庭における様子については、母親は幼稚園の教師からの紹介のため、幼稚園を断られては困るというような様子で、家庭で困るこ

とは殆んどない、とはじめのべている。その後、面接を重ねた結果えた家庭での問題は次のようである。食慾は乳児期より不振で苦勞している。Y・Kが二才三か月で弟が出生したが、生まれたての弟をひどくいじめるので、人形を与えたりした。現在でもひどくいじめる。それでいて母親がいないとよく面倒をみるようだ。近所の家についていたずらをするから、心配でよその家に遊びにやられない。カバンや洋服をかじる。何でも粗末にする。友達と一しょに近所の店でガムをとってきた。母親に対して反抗的で言うことをきかない。しかし「おべんとうを残してくるとおかあちやまが悲しむから」と途中で捨ててきたりする。

(生活史)

出生状態—— 熟産、正常分娩、第一度仮死、生下時体重、三キログラム。

授乳状態—— 三か月まで母乳、三か月後人工栄養になったが、牛乳が合わないで、飲まず苦勞した。完全離乳 一年

發育状態—— 歩き始め 十か月半、話し始め 一年

既往症—— 牛乳を飲まないで、小児科で注射をしたりした。湿疹が得意やすい。麻疹二年六か月、風邪はひきやすい。

排尿排便のしつけ—— 生後一年頃より便所でさせるようになった。

大小便とも苦勞なくしつかり、口で一年十一か月で教えるようになる、おむつは完全にとれた。

そいねは全くしなかった。最近、弟と先を争って朝、母親の寢床に入ってくる。

母親は自律のためと考えて、初めからサークルに入れてほうっておいた。

母親は弟もすぐできたことなので、早くおとな扱いにした、と思うし、早くおとなになってもらいたいと思っている。

近所に同じ年令の子どもはいるが、遊びは長続きせず、すぐけんかする。父の勤め先の官舎の鉄筋アパートに住んでいる。

(家族関係)

父親は三十五才、大学卒、技師、母親は二十八才、短大卒、無職、弟は二才六か月、女中が本児の二才八か月から三才四か月までいて、育児、家事を手伝っていた。

(初回面接)

昭和三十四年六月二十七日に約束した時間にY・Kをともなつて来所した。Y・Kに対して、鈴木ビネー法による知能検査をおこなった。母親からすぐ離れて入室する。すぐ答えるが、解らないと課題と違うことをする。少しおちつきがないが、テストには割合によく応じる。テスト結果は知能指数一二五(三才一か月のときおこなつたときは一一九)。

母親との面接をおこなうつもりで、テスト後少し待合室で待っていてくれるように頼む。母親と面接をはじめると、面接室の外にできて、泥をつかんで、母親と、面接中の部屋の窓に投げつけた。筆者は、母親との面接を本児が非常に嫌がっているように思われたので、六月三十日に母親だけの来所を求めて中止した。

六月三十日に母親は弟をつれて、定刻に来所した。弟がいたので

面接はブレイ・ルームでおこない、弟は玩具であそばせ、その側で母親と面接をおこなった。母親は緊張した様子で、幼稚園で困った行動が多くて、注意を受けた。家庭では余り困ったことはない。この子のことを幼稚園でもてあましているらしい。止めさせられるようになっては困ると思うし、かわいそうだ。家庭では余り困ったことはないのに、どうしてこんなだろうと訴える。筆者は出生時の仮死状態のこともあり、一応コントロールはしているようだが、異常行動が多いので、脳波の測定をすすめたところ、母親はすぐに了解した。そこで当小児科に脳波を依頼し、その結果を含めて、もう一度面接をしたいと話した。

脳波結果——全く異常なしと連絡があった。

(母親との第二回)

八月五日、母親のみ来所。脳波の結果を説明すると同時に、子どもに対する遊戯療法を簡単に話し、Y・Kに対しても適当な治療法だと思ふ、という、是非ともお願いしたいと希望した。そこで、時間、費用につき話し合うと同時に、Y・Kの前で本人の話をしながら、電話、手紙で連絡があれば、面接をすることを話した。

(経過)

昭和三十四年八月十八日より昭和三十五年十月十七日まで(但し家の都合で四月八日から五月二十日まで休み。第三十回—第三十一回) Y・Kに対して筆者が遊戯療法五十一回をおこなった。無断で欠席したことはなく、来所時間も一定していて、十分以上のおくれは六回ほどであった。次に遊戯療法の経過をごく簡単にのべてみよう。

〈第一回—第二回〉

すぐにひとり入室し、よく遊び片付けまでよくして帰る。

〈第三回—第十四回〉

母親から離れて入室するのに抵抗を示し、弟が一しよにきた日は、どうしてもひとりで入室せず、弟と一しよに遊戯室に入室した。弟に対して、始め世話をしていたが突然頭の毛をむしって泣かせてしまう。治療中はだんだんと攻撃的行動を示し、治療者の万年筆の先を割って、治療者の顔色をうかがう。叱られないと、直るかと何回もきく。治療者は罪の意識をもたせないように努力した。

〈第十五回—二十四回〉

母親からは簡単に離れるようになったが、入室をすぐにしないうで、階段を屋上まで上ってきたりする。しかし、黙って待っている、入室してくる。粘土を壁にぶつけたり、人形をふみつけたりする。その反面、折紙を折るときなどは正確である。マシントイの構成などは熱心にする。本を読んでもくれといって、待合室から持ってきたりする。治療者が読んでやると、もたれかかって座り、何度も同じ本を読むようになって、熱心に聞き入っている。

〈第二十五回—三十回〉

攻撃的行動は少なくなり、描画をしたり、乗物を動かして遊ぶ。治療者に本を読んでもらうことはつづく。

〈第三十一回—四十回〉

休んだ後で少し攻撃的行動は増加し、床に水をまいたり、折紙で色水をつくる。本を読んでもくれといって、熱心に聞いている。

〈第四十一回〜第五十一回〉

攻撃的行動が少なくなってきた。描画し、折紙、積木など構成的な遊びをする。本を読んでもくれということは少なくなってきた。

以上五十一回で、母方、祖母の家の女中がいなくなった（弟を家におくため、留守にきている）ことと、幼稚園で殆んど問題がなくなったし、食事もよくなるようになったので、母親と話し合つて、治療を終結した。

前記紹介者の幼稚園教師が、幼稚園側との不和で三月で退職された。そのため幼稚園での本児に対する扱いが急に変わり、叱られ続けているのでよくないからという理由で（また祖母の病気で治療を休んでいるためもあるように思う）退園させ、H幼稚園に転園させようとしたが、一週間の観察期間で断られ、U幼稚園では快よく引き受けてくれた。Y・Kを理解して、急いで集団行動に入れようとしなかつたので、だんだんと生活になれて、こちらの治療の進むとともに問題行動を示さなくなってきた。

二、考 察（母親のカウンセリングを中心に）

Y・Kに対して遊戯療法を筆者がおこない、その間母親に筆者が七回カウンセリングをおこなった。そして、母親の求めにより、紹介者である幼稚園の受持教師と一回面接をおこなっている。

母親ははじめ、幼稚園から相談するようにとすめられたためか、非常に警戒的であった。Y・Kのことについても、家庭では殆んど問題ないと語っている。治療者の立場について、ここでの話しは

幼稚園に母親の了解なしに連絡はしないということなどを話した。

母親はだんだんにY・Kの困っているいろいろな問題につき話しはじめた。弟の出生当時から、ひどくいじめ、ほとほと困り、人形を与えてみたりした。それでもだんだんとひどくなるので、当所に三才一か月のときに相談に訪れ、友達遊びをさせるようにいわれた。現在でもいじめて困る。食慾がなく、おべんとうも殆んど食べたくない日がある。母親は余り食べないとい体のためによくない心配になり、つい口やかましく言ってしまう。父親がそばにいて、そんなにいうと却つて食べられないだろうという。父親自身も食慾はない方だ。そのため、食事に父親が帰ってくると、もう食べないでいいねといって、立ち上ってしまう。母親もいわない方がよいとも思うが、ついいってしまう。そのためかおべんとうを残して来たときに、途中で捨ててくるようになった。そしてどうしてそんなことをするのかと聞くと、「おかあちやまが悲しむから」という。自分のいったことをひどく気にしているのだと反省した。結婚後、すぐに妊娠したため、この子が出産したとき、ひどく大へんだと思つてしまった。小さいうちから自立心を養うことが大切だと思ひ、殆んどねかせばなしにし、はいはいするようになってからは、サークルに入れっぱなしで育てた。三か月頃より乳をのまなくなり困り、当小児科で診察を受けた。それからずっと食慾不振で困っている。弟ができてから、母親にかえて甘えてくるようになった。この子は自分に顔もにているので、余り好きでない。弟の方は同じことをしても可愛げがあるけれど、この子がすると憎らしくてしかた

ない、という。面接の際、弟をともなって訪れたことがあるが、本児の扱い方と非常に異り、弟がいたずらをして、寛容な態度をとっているのに対して、本児がちょっとしたいたずらをして、そういうことをしてよいのかと、反省させていた。

幼稚園の先生に会ってくれと希望したので、紹介者である受持教師と打ち合わせて、十月二十日來所していただいた。礼拝のとき大きな声を出す。自分に声をかけられたり、してもらっているように、注意をむけられているようなときはひどく素直である。おべんとうはいつもよく考えてつめてある。おかずだけ先に食べて、残すと「お母ちゃんがガツかりするから、先生手紙かいて」という。

母親のきげんをいつも気にしているようだ。この間家庭訪問をしたら、余りに弟との扱いが違うのでびっくりした、と話し、園長はひどくこの子をきらっている。受持教師は少し手をかけた方がよいと思うが、甘やかしてはいけない、きびしくしろといわれる。きびしくしたらいけないと思うが、と述べている。その後、この教師は園長と意見が合わず、三月で退職した。

その結果、幼稚園での本児の扱い方が違ってきた。また祖母の病気でこちらの治療を休んでいたのも影響し、本児の幼稚園での問題行動は一時、大分少なくなってきたのに、再びひどくなってきた。

園長に母親が呼び出されて、家での扱い方が悪いからだ、もっときびしくしなくてはと言われた。母親はひどく腹を立て、幼稚園を退園させた。嫌われている幼稚園に入れておくのは可哀そうだ。本児を赤ん坊のときから、おとな扱いにしすぎたと、最近反省してい

る。早くから、サークルに入れっぱなしにして育ててしまった。母親は本児が自分に気に入られようと随分努力しているように感じることさえある。それをすなおに表現できず、ひねって注意をひこうとしているのではないかと思うようになった。弟と較べてみると、弟と同じ年頃の本児には、上だということではいろいろな要求をしてもまったく、弟は小さいのだからと本児に我慢させ過ぎたと思う。園長はきびしくないからだというが、そうではないと思う、と話し、この子に適当な幼稚園と、家の近所の幼稚園をまわって歩き、事情を話して、快よく引き受けてくれたU幼稚園に転園させた。転園当時は、治療前の状態のようであったが、すぐに無理やりに集団に入れようとしなくて、暖かい態度で迎え入れてくれた。新しい幼稚園の生活にだんだん慣れて、おべんとうの時に立って歩くこともなくなり、運動会にも皆んなと同じようにしたので、母親は嬉しくなったのとべている。母親の扱い方も非常に違ってきた。朝寝床に入ってきたときなど入れてやるようになった。その反面、床屋などにひとりでゆきたいというときには行かせ、今まではお金を絶対に持たせなかったのに、小遣いを与えた。そのためガムをとってやることもなくなった。このような状態について、母親自身、自分の扱い方をかえて、よくなってきたように思う、とのべている。昭和三十六年の年賀状で元気に通園していると知らせてきた。

(愛育研究所)

固定運動遊具のいろいろ

と その特徴

および

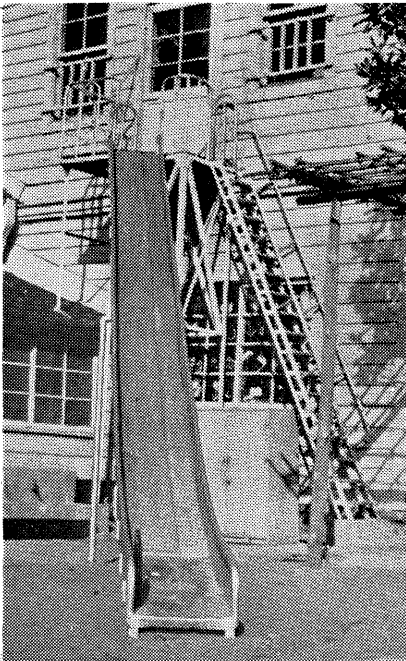
②

教育的意義

四、すべり台

一般に、すべり台は、平衡感覚、スピード感、身体支配能力、高感、あるいは、身体の急激な移動に対する内臓機能の調整能力などを養うという身体的価値をもっているとともに、仲間のものが順番を守ってすべるとか、スピードの調節方法とか、あるいはスリルを満足するなど、知的、社会的、情緒的価値をもっている。

第15図 単式すべり台 二階から



日本女子大学付属豊明幼稚園

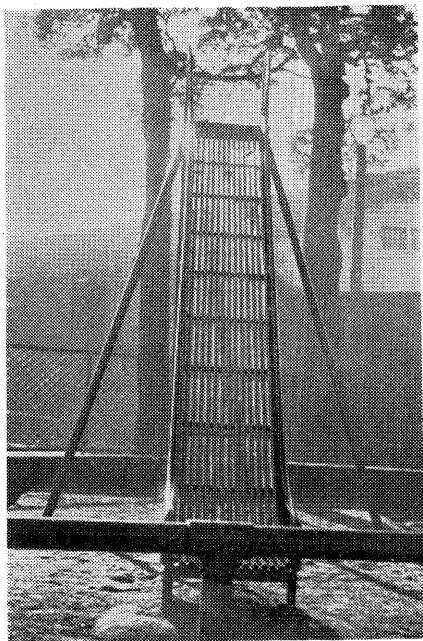
第14図 単式すべり台



徳島市立助任幼稚園

第17図 単式すべり台

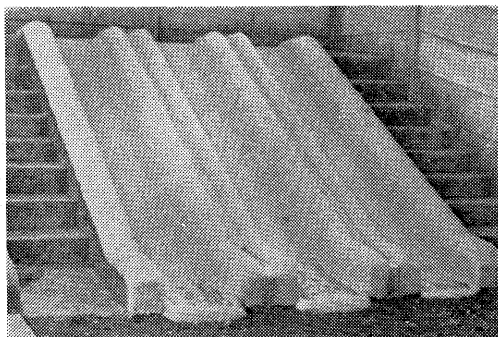
ビニールパイプを敷いたもの



新宿区 区立水野原児童遊園地
(杉並区大宮前3 日都産業KK 40,000円)

第19図 平行すべり台 (三台平行)

オール・コンクリート製

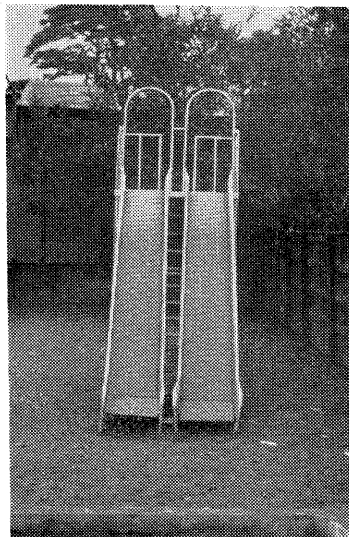


第16図 単式すべり台 屋上から



文京第一幼稚園

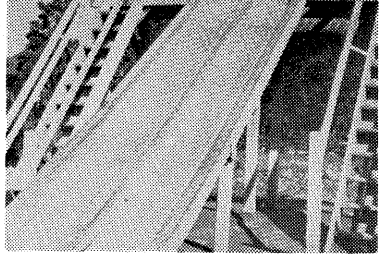
第18図 平行すべり台 (2台平行)



渋谷区 清泉幼稚園

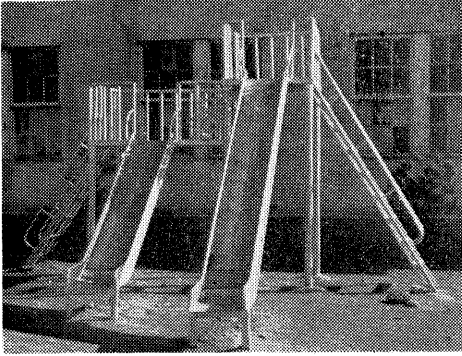
(大田区堤方町718 篠沢鉄工所)
¥40,000円

第20図 伸びきりすべり台（オール・木製）



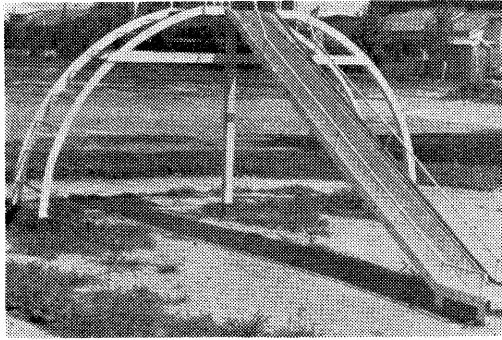
徳島市梅の花保育所

第21図 親子すべり台



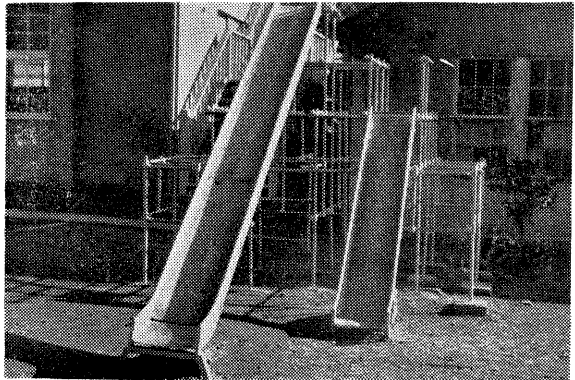
日本女子大学付属豊明幼稚園

第22図 太鼓橋付すべり台



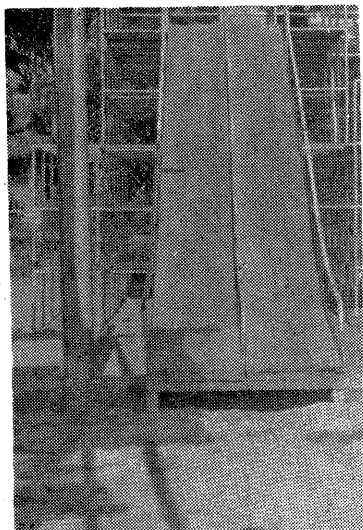
徳島大学付属幼稚園

第23図 ジャングルジム付親子すべり台

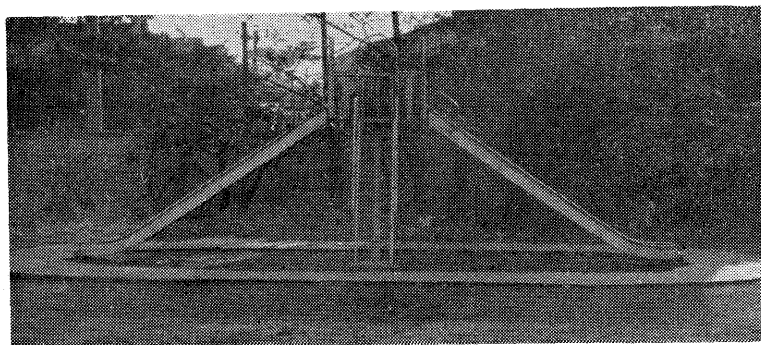


日本女子大学付属豊明幼稚園

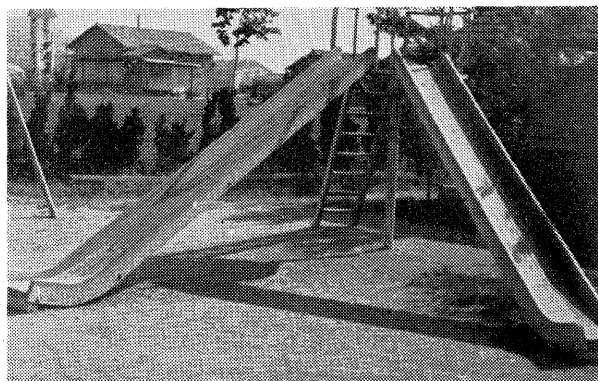
第24図 ジャングルジム付仲じきりすべり台



第25図 山形すべり台



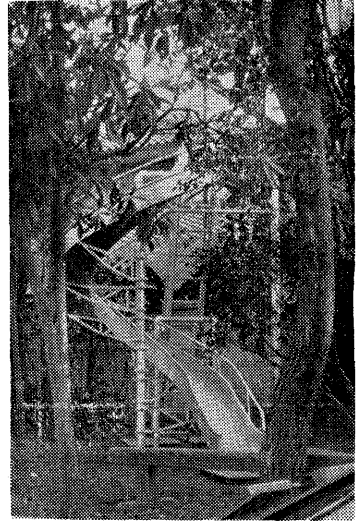
渋谷区
福田幼稚園



第26図 山形すべり台

徳島市加茂名幼稚園

第27図 螺旋すべり台 大型



渋谷区 清泉幼稚園

(東京都太田区堤方町718 篠沢鉄工所)
¥80,000円

第29図 螺旋すべり台 小型



豊島区 東洋音楽大学付属幼稚園

(篠沢鉄工所 ¥58,000円)

第28図 螺旋すべり台 中型



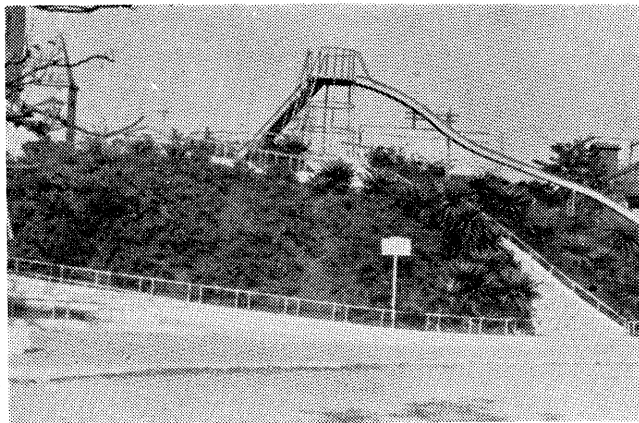
練馬区 みりの幼稚園

(篠沢鉄工所 ¥68,000円)

螺旋すべり台は特に、目まいに対する調整能力を養うことができるとともに、他のものより、一層変化しているところから、スリルと興味を十分味わうことができる。

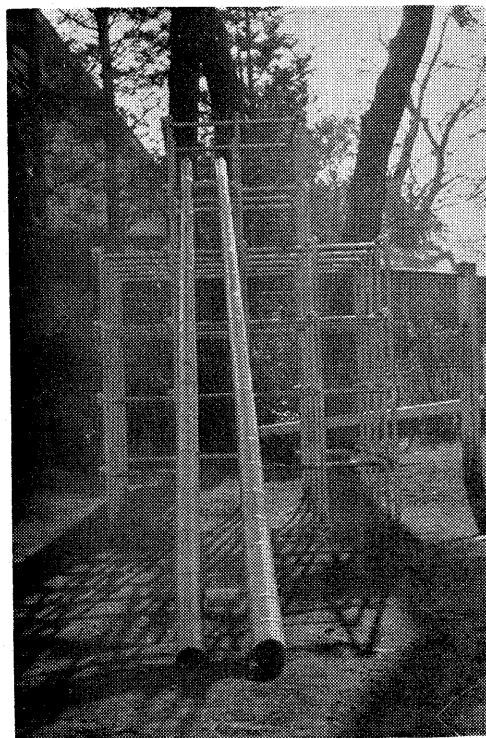
第30図 単走波状すべり台

単走波状すべり台は、長さ約一五米。波状も大きく、スリルと変化とスピードに富んでおる。大体年長児向き。



台東区 浅草入谷公園
(東京支店 美津野運動具製作所)

第31図 ジャングルジム付竹すべり台



ジャングルジム付竹すべり台は、日体幼稚園長加藤孝吾氏の発案によるものであるが、2本の竹だけであるので、子どもたちが種々想像的すべり方をするのであつた。しかし、手摺がないので危険性があり、年少児には不向きである。

世田ヶ谷区 日体幼稚園
(東京 小倉運動具製作所)

(岡本卓夫記)

固定運動遊具による

幼児の遊びの発達についての実験的研究 (6)

——安全に関する理解度について——

岡 本 卓 夫
石 川 豊 子

九、雲 梯 遊 び

雲梯遊びにおける子どもの安全に関する理解の程度は、第九表に示す如く、ことば使用では、理解している方が、行動では、理解していない方が多くなっている。だが、全体的に、理解、不理解という点では、両者半々の頻数を示しておる。

しかし、理解していることばは、各年令共女児に多く、「押しではだめよ」とか「ちょっと待って」など、先ず自分自身の安全ということを意識して、危険な状態になる前に、防止的にそれらを発している場合が多い。かかる意識は、年令と共に増加しておる。

ところが、理解していない言・動は、各年令共男児に多く、「手ばなし」とか「足をひっぱる」など、他の子どもへの危険ということとはあまり考えず、自己中心的、スリリングな言・動が多い。しかして、かかる傾向も、年令と共に増加しておる。

かく考えてみると、この遊具における安全に関する問題は、四歳

児および女児においては、さほど心配もいらなと思う方が、やはり、五、六歳の男児では、一応注意することが必要であろう。

しかし、この遊具は、懸垂力や腹筋力が十分でなくては遊べないし遊びにあまり変化がもたせないという欠点もあって、彼らには余り好まれておらず、したがって使用率も少ない。

だから、危険な場面も比較的少なく、指導にあたっては、先ず、五、六歳の男児に注意し、上側にはあまり上がらせないようにさせたり、ひっぱったりさせない程度で、安全な指導ができるのではないかと思われる。

一〇、固 定 円 木 遊 び

固定円木遊びにおける子どもの安全に関する理解の程度は、第一〇表に示す如く、言・動共に理解していない方が多くなっている。

しかし、理解している言・動では、各年令共女児に多く、「押し手なしよ」とか「危険とみるやすぐ下りる」など、先ず自分の安全

ということを意識して、危険におかされる前の防止的言・動が多くなっている。しかし、ことば使いは年令と共に増加しているが、行動は逆に減少している。このことは、四歳児は「しゃがんでいる」など、初めから安全な行動をとっているの、喋る必要もないが、五、六歳にもなると活動的になってくるし、さらに女兒は、平衡感覚が発達してきて、これでの遊びを好むようになるから、そこで女兒特有の用心深さと相まって、かかる防止的ことばが多くなってくるのだと考えられる。ところが、理解していない言・動は、各年令共男児に多く、「落っこ」とか「割りこみをする」など、他の子どもの危険ということはほとんど意識せず、自己中心的、危険な言・動が多い。しかしてこれらは、五、六歳になって激増している。

かく考えてみると、この遊具遊びにおける安全に関する問題は、先ず、四歳児はいいとして、五、六歳児では、男児はもちろんのこと、女兒においても活発に使うようになるから、注意する必要がある。だが、何といっても、やはり、五、六歳の男児は、荒々しい行動をするから十分注意することが肝要である。

したがって、これが遊具での安全な指導するには、年令別に使

用させてやるのか、男・女別に使用させるようにしてみることも一試案だと思われるが、元来、この遊具は、地面に低く固定されていて、子どもたち誰でもがごく無造作に上がったたり、下りたり、渡ったりすることができるので、その時々々の接触に注意するよう、すなわち、他の子どもにさわったり、他の子どもをついたり、あるいは割りこみなどさせないよう（特に五、六歳の男児に）指導しておくば、先ず安全な指導ができるのではないかと思われる。

分 類	項 目	4 才		5 才		6 才		計	
		男	女	男	女	男	女		
理解している	上がらしてやろうか	1		1				2	
	そんなことしたら危ない				1			1	
	おそろしい、下ろして!				1		1	2	
	上がり方教えてやろうか			1				1	
	そろそろ行けよ					1		1	
	あがらせて		1				1	2	
	のいておれ、危ないぞ					1		1	
	押してはだめよ		1				1	2	
	そこへ上がっていくぞ			1				1	
	ちょっと待ってよ					2		2	4
計		1	2	3	4	2	5	17	
行 動	手元、足元に注意しながらゆっくり上を渡る				1		1		2
	計	0	0	1	0	1	0		2
理解していない	空中ぶらんこしよう				1				1
	手ばなしでこい				1		2		3
	早く上がってよ	1	1		1				3
	こら! くすぐるぞ				1				1
	早くのけ						1		1
	計	1	1	3	1	3	0		9
行 動	とび下りる				1		1		2
	上で片脚をふり回す				1				1
	進い越していく(上側で)				1		2		3
	足をひっぱる	1			1		2		4
	計	1	0	4	0	5	0		10

第9表 雲梯遊び

以上二〇種の各遊具について、彼らの安全に関する理解の程度や、それが安全な指導上の注意について、一応具体的にのべてみたが、さらに、固定運動遊具全般における彼らの安全に関する理解の程度をみるために、それぞれ一〇種の遊具で発生したすべての言・動を、年令別、発達のなまどめてみると、第一一表—一四表に示す如くである。これらのことから、固定運動遊具全般における彼らの安全に関する理解の程度は、先ず、

〈四才児では〉

男児に、理解してない行動が少しみられるが、全体的には、理解している方が多くなっている。しかし、これは、理解しているとみるよりも、むしろ、四歳児は、身体的諸発達が十分でないのと、その上、年長児に何時も遊具を独占されていて、これらになれる間も少ないから、自然、かかる遊具遊びに臆病的になっているというようなことから、かかる結果がでたのではないかと解する方が、むしろ妥当ではなからうか。

したがって、四歳児の場合は、常に教師がそばにいて、彼らが安心して遊べるようにしてやるべきである。次に

分類	項目	4才		5才		6才		計	
		男	女	男	女	男	女		
理解している	ことば使い	寄ってきたら危ない			1			1	
		押すんなしよ			3		2	5	
		ゆるくつけ！ 危ないぞ			1		2	3	
		割りこみ危ない			1		2	3	
		しゃがんでいた方が安全だ					1	1	
	計	0	0	1	5	0	7	13	
	行動	しゃがんでいる	2	3			1		6
		危険とみるやすぐ下りる		1		2		1	4
		四つ這いになる		1					1
		円木に股がっている		1		1		1	3
計		2	6	0	3	1	2	14	
理解していない	ことば使い	寄ってきたらつき落すぞ			1		1		2
		落っこせんか			2		2		4
		立ってしよう			1		1		2
		早く歩いて						1	1
		この上からとび合せんか			1				1
		この上で走りっこしよう			1		2		3
		割りこみした			1	2		3	6
		計	0	0	7	2	6	4	19
	行動	つき落っこをする	3		3		5		11
		たたき合いをする					1	1	2
		片脚立ちでふざける		1					1
		円木上を両脚でとぶ	2		2		1		5
		割りこみをする			4	3	7	4	18
後から押す					3		2	1	6
計	5	1	12	3	16	6	43		

〈五才児では〉

女児の場合、言・動共に四歳児より少なくなっているが、男児の場合は、理解してない言・動が、四歳児よりきわめて多くなっている。すなわち、男児は、この頃から遊具にもなれ、それに興味ももってくるし、加うるに活動も活発になってきて、全く自己中心的な荒々しい行動に無中になってくるので、自己および他人の「安全」ということには、ほとんど無意識になるのだと思われる。だが

第10表 固定円木遊び

第11表 4才児

分類	遊具名 性	鉄 棒		すべり 台		ぶらん こ		ジャン グル ジム		シー ソー		太 鼓 橋		回 転 台		遊 動 橋		雲 梯		固 定 円 木		計	
		男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
		理 解	ことば	2	1	1	0	3	5	0	1	2	5	3	3	8	4	1	0	1	2	0	0
3				1		8		1		7		6		12		1		3		0		42	
行 動	2		1	0	3	4	9	5	5	0	1	4	5	0	1	3	0	0	0	2	6	20	31
	3		3		13		10		1		9		1		3		0		8		51		
不 理 解	ことば	0	1	1	1	1	0	0	0	2	0	3	3	5	0	0	0	1	1	0	0	13	6
		1		2		1		0		2		6		5		0		2		0		19	
	行 動	2	1	1	1	13	5	1	0	2	0	6	5	5	1	4	0	1	0	5	1	40	14
		3		2		18		1		2		11		6		4		1		6		54	

第12表 5才児

分類	遊具名 性	鉄 棒		すべり 台		ぶらん こ		ジャン グル ジム		シー ソー		太 鼓 橋		回 転 台		遊 動 橋		雲 梯		固 定 円 木		計	
		男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
		理 解	ことば	2	4	2	1	0	6	0	0	3	5	3	5	10	6	3	1	3	4	1	5
6				3		6		0		8		8		16		4		7		6		64	
行 動	2		0	0	2	5	9	0	2	1	0	4	6	0	1	3	1	1	0	0	3	16	24
	2		2		14		2		1		10		1		4		1		3		40		
不 理 解	ことば	0	0	6	0	2	1	7	0	5	0	6	3	20	0	5	0	3	1	7	2	61	7
		0		6		3		7		5		9		20		5		4		9		68	
	行 動	2	2	10	0	12	4	3	0	8	1	8	3	12	2	9	0	4	0	12	3	80	15
		4		10		16		3		9		11		14		9		4		15		95	

ら、女兒の場合、男児に遊具を独
占されて、あまり遊べなくなるか
ら、かかる結果がでてきたのだと
思う。したがって、五歳の男児が
遊ぶ時は、特に注意しておくこと
が必要である。

〈六才児では〉

ここにおいても、やはり男児の
理解してない言・動が多いが、そ
の反面、理解したことばが多くな
ってきている。また、女兒に少し
理解してない言・動が増してきて
いるが、これは、六歳になって活動
が活発になってきたからだと思わ
れる。

しかし、全体的にみて、行動で
は、五歳児より理解してない面も
多少多くなっているが、ことば
使いでは、五歳児より理解して
いる面が多くなっている。その
差を、四歳と五歳との間にみた差
と比較考え合わせてみると、この
頃から、安全に関する理解の芽生
えができてはじめるのではないかと

第 13 表 6 才 児

遊具名 分類	性別	鉄 棒		す べり 台		ぶ ら ん こ		ジ ャ ン グ ル ジ ム		シ ー ソ ー		太 鼓 橋		回 転 台		遊 動 橋		雲 梯		固 定 円 木		計	
		男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
		理 解	こ と ば	1	3	8	2	1	4	1	3	2	6	2	7	24	11	11	5	2	5	0	7
解	行 動	1	0	2	2	4	8	0	0	1	2	5	7	0	1	4	1	1	0	1	2	19	23
		4		10		5		4		8		9		35		16		7		7		105	
不 理 解	こ と ば	0	0	4	1	3	2	2	0	5	2	9	1	6	2	3	0	3	0	6	4	41	12
	行 動	5	8	14	2	11	3	2	0	10	2	11	6	6	9	12	3	5	0	16	6	92	39
		13		16		14		2		12		17		15		15		5		22		131	

遊
べ
る
よ
う
に
な
る
よ
う
に
な
る

識
し
な
が
ら
遊
べ
る
よ
う
に
な
る

注意事項を意
識しながら遊
べるようにな
る

第14表 固定運動遊具遊びにおける
言・動からみた安全に関する
理解の発達(%)

遊具名 分類	性別	4 才		5 才		6 才	
		男	女	男	女	男	女
		理 解	こ と ば	35	35	20	28
解	行 動	19	30	12	18	11	13
		70		48		66	
不 理 解	こ と ば	20	10	47	5	26	8
	行 動	32	13	59	11	53	23
		30		52		34	
		49		30		24	
		51		70		76	

註 すべての言・動をそれぞれ100とし、それを理解、不理解に分けて、年令別にパーセントであらわした。

結 論

以上のことから、固定運
動遊具遊びにおける子どもの安全に関する理解の程度を簡単にま
めてみると、四歳児は、身体的にまだ未発達であるのと、遊具にな
れていないのとで、臆病的で用心深く、五歳児になると、遊具に興
味をもちはじめ、活動も急激に活発になり、その勢いにまかせて、
安全を意識しない危険な行動が多く、六歳児にもなると、遊具にも
なれ、五歳時代の活発な経験から得た安全に関するいろいろの問題
を、ようやく意識しながら遊べるようになるといえよう。
しかし、これらは、すべて彼ら自身が活動の主体になった時にい
える場合が多く、客観的、傍観的立場にある場合には、ほとんど安
全を意識していない場合が多いといえる。
最後に、この実験に御協力下さった付属幼稚園、助任幼稚園の諸
先生方に心から感謝の意を捧げます。

△岡本(徳島大学) 石川(徳島・相川保育所)▽

日本幼児保育史の研究



一、創成期の保育施設

創成期のすがたは朦朧として多いが、わが国の最初の保育施設もまたこの例にもれず明白でない。

従来は明治九年にもうけられた東京女子師範学校附属幼稚園が一番古いといわれてきたが、それより前に、京都や横浜に二、三の保育施設ができていた。このうち横浜の「亜米利加婦人教授所」は外国人の設立したものであるが、京都の柳池校に附設された「幼遅遊嬉場」はわが国の人がつくった公立のものである。このほかにも京都などに一つか二つ保育施設がもうけられているかもしれないが、よく分らない。

また維新以前の保育施設として京都の幻心という人が隠居した後二、三歳から七、八歳ぐらいまでの子どもをあつめて遊ばせたことが、安永二年に公刊された永井堂亀友の「小児養育質気」(上野園書館蔵)という本にかかれており、わが国の幼児保育施設は古くは江戸時代にさかのぼることができるといえる。

すなわち「小児養育質気」の巻之五によると、京都の中京姉小路に住んでいた布袋屋徳兵衛という人がその子に世帯をゆずり、幻心

日本保育学会共同研究小委員会

はじめに

日本保育学会では昭和三十一年に、幼稚園創設八十周年を記念し共同研究として「本邦幼児保育史の研究」をはじめた。研究委員としては、山下俊郎(委員長)、小川正通・莊司雅子・及川ふみ・児玉省・鈴木とく・鈴木信政・竹田俊雄・平井信義・松村康平・村山貞雄・森脇要がこれにあたった。なお研究顧問として海後宗臣氏に依頼し、快諾を得た。

同年七月に第一回の共同研究委員会をひらいて討議した結果、今後の具体的な研究は小委員会をつくって、これにまかせることになった。小委員会の委員は、村山貞雄(委員長)・赤池溥子・岡田正章・安戸健夫・津守真・水野浩志・豊田玲子(三十五年四月より)の七名が委嘱された。なお、小委員会の研究顧問に古木弘造氏の承諾を得た。

それ以後研究の実際は、小委員会の活動にうつったが、小委員会は、しばしば連絡会をひらいて具体的な研究の打ち合わせと研究成果の交換を行なう一方、日本保育学会の大会で毎年研究報告を行なってきた。

今月号から本誌に連載されるのは、以上の共同研究の結果によるものである。なお文章の終りに執筆者名を一応記しておいたが、以下の文章はすべて小委員会の全員が協力して作成したものである。

と改名して町内に隠居した後、子どもを集めて遊ばせることを楽しみとし、自分の家を子どもが遊びまわれるように工夫している。たとえば庭で子どもがけがをしないように注意したり、座敷のうち二畳を白砂にして素焼の人形や彩色の雀鳩をならべ子どもに自由にとらせるようにするなど、細心の注意をはらって近所の子を保育している。

この幻心の保育活動は、動機が子ども好きからであり、目的は幼稚園と保育所を綜合したような、いかにも最初の保育施設にふさわしい形のものであった。(村山)

二、横浜の亜米利加婦人教授所

明治初期にあたって、幼児教育の普及に力があつたのは、基督教宣教師であつた。

基督教宣教師による最初の幼稚園は、後に述べるように明治十九年にポートル女史によって金沢にひらかれた北陸女学校の幼稚園、および明治二十年にハウ女史によって創られた神戸の頌栄幼稚園がその最初のものでとされている。幼稚園として開設されて、実際に成功をみたのは、この二つが最初のものであるが、幼児をあつめてその教育を志したのは、もっと初期のものがある。すなわち、明治四年に、メリ・ブライン(Mary Bruyn)、ジェリア・クロスビー(Julian Crosby)、および、ルイゼ・ピアソン(Louis Pierson)の三人の女宣教師によって、横浜山手四十八番地にひらかれた「亜米利加婦人教授所」がこれである。

この施設については、高谷道雄がその著「ドクトル・ヘボン」のなかで紹介しているが、これによると横浜開港にあたって、そこに

発生したラシャメンたちと白人とのあいだに生まれた混血児の問題の解決をかねて、幼児施設を志したものであるらしい。

当時アメリカ合衆国では幼稚園運動が社会問題解決のための社会運動として展開されはじめたときであつて、このような異国における混血児問題は、米本国に訴えるにじゅうぶんな価値をもつたものと思われる。その結果横浜に留の宣教師によって、この実情が訴えられ、それに応じて、三人の婦人がはるばると日本に渡つてきた。

このことについて高谷道雄はつぎのように紹介している。

明治四年八月二十八日米国婦人一致伝道協会から派遣せられた三人の婦人宣教師が横浜に来た。そして山手四十八番館に亜米利加婦人教授所(Mission Home)を開始し、翌五年ブラウン邸の隣二百十二番地に移転して、日本婦女英学校と改称し、益益女子教育につくすことになつた。共立女学校がそれである。

この三人の婦人宣教師とはミセス・メリー・ブライン、ミス・ジュリア・エヌ・クロスビー及びミセス・ルイゼ・エッチ・ピアソンであつた。二百十二番館とブラウン邸の二百十一番館とは隣接し、キダー女史も親しくこれらの婦人宣教師と協力した。現在では、舊ブラウン邸内は共立学園の構内となり教室が建つて居る。彼等婦人宣教師三人が横浜に上陸して最初に日曜礼拝をしたのはヘボン博士の施設所であつた。三人の婦人宣教師の伝道方針は、開港場横浜を中心とした混血児の保護と教育とであつた。横浜に於ける初代宣教師たちヘボン、ブラウン、タムソン、バラは常にこの混血児の問題を苦痛に感じて居たのである。ジェームス、バラは特に日本女史の現状に同情し、この教育機関の設置と、併せて混血児問題の解決について米国の基督教會に訴えた。これに応じて立ちあがったのが米国婦人一致伝

道婦人会であった。そして同会はニューヨーク州アルバニー市の淑女ミセス・ブラインを代表者として外に前記二人の婦人宣教師をその同業者として派遣するに至つたのである。(中略) 当時は切支丹禁制の時代であつたし、外人を敵視していた時代でもあつたから、これら三人の婦人宣教師の努力と苦心はなみなみならぬものがあつた。しかしその献身的な働きには当時の碩学、中村敬宇先生も非常に感激して、自らミッジョン・ホームの生徒募集のポスターをかけた位である。(高谷道男著「ドクトル・ヘボン」一九五四年六月発行 牧野書店 三三七―三二九頁)

つぎに掲げるのは、当時の「亜米利加婦人教授所」の生徒募集広告の全文である。ここに記してあるように、三歳以下の小児は引き受けなかつたようである。ただし、「母ナキモノハ引受クベシ」とあるから、現在の保育所や養護施設のようなものも意図していたらしいことがわかる。しかし、子どもは入塾(宿泊すること)でも、通稽古(通園のこと)でもよいとしており、費用として、宿泊者は、十ドルから十五ドルを、通園者は、四ドルを徴収することになつてゐる。

この広告文にみるように、当時の宣教師が開港場の社会問題の解決に身をもつて當つたことがわかる。そしてその前衛線として、幼児の問題がとり上げられたのであつた。

No 48
on the Bluff

亜米利加婦人教授所

横濱山ノ手
四十八番

Mary Pruyn.

Superintendent.

Julian Crosby.

Louis Pierson.

Assistants

馬利普拉延
如利亞古羅士倍
累斯比爾遜

コノ教授所ハ亜米利加婦人伝道会社ニテ設クルトコロニシテ、日本人、外国人ノ差別ナクソノ父母ソノ兒子ヲ教養セント欲スルモノアラバ、コノ教授所ニテ引受ケ世話ヲ致ストコロナリ、三才以下ノ小児ハ引受ケザル事。但シ母ナキモノハ引受クベシ。

凡ソ小児、入塾ナリトモ通稽古ナリトモ、ソノ意ニ任スベシ。然レドモ入塾の方、小児ノ為メニ益アルベキナリ。

モシ小児ノ母、衣服洗濯等、ソノ外ノ事マデモ、一切世話ヲ頼ミ度ハ、女教師コレヲ引受クベシ、モシソノ父、ソノ小児ノ來ランコトヲ欲セバ、ソノ小児親ノ許ヘ省問スルヲ得ベシ。モシソノ父母、教授所ニ來リ、ソノ小児ニ逢ハント欲セバ、午後第四時ヨリ、第五時マデノ間ナルベシ。病氣ノ時ハ何時ニ拘ラズ見舞ニ來ルベシ。

教授及ビ食物居住ノ費用トシテ毎月十元ヨリ十五元マデヲ出スベシ。

通稽古ノ者ハ毎月四元ヲ出スベキ事。

会社ニテ、コノ教授所ノ百事便利ニテ且ツ有益ノ功効アルベキヤウニト心ヲ盡セリ、日本人、外国人ノ差別ナク、懇意トナリタル人ハ随意ニ訪問スベシ。コ、ニ居ル小兒ハ実母ノ如キ親愛ノ心ヲ以テ万事ニ心ヲ付ケ世話ヲ受ルヲ得ルコトナリ
ソノ他委細ノ事ハコノ教授所ニ来リ教師ニ逢フテ問ヒ給フベシ。

余十餘日 コノ教授所ニ寓セリ。コノ三ノ女教師、何モ親切懇篤ナル人ナリ。現今小兒四人アリテ、教師ノ世話ヲ受ケテ居レリ。実母実子カト疑フルホドニ、相ヒ驩和親愛セリ。一ニハ、智慧生長スベク、二ニハ身体強壯ナルベシト思ハル、ナリ。世ノ父母、モシソノ兒子ノ善キ教育ヲ受ント思フモノ、コノ教授所ニ託シ置カバ、イカバカリカ、ソノ家ニテ育ツルヨリハ善カルベキナリ。

明治四年辛未十月 中村正直識、

(同前三二九〜三三一頁)

なお、これに符合する記事が、「正木護・耶穌教課者報告書」のなかにもみられるので、つぎにあげておこう。正木護は、関信三(安藤劉太郎)とともに、太政官課者として耶穌教員教師のあいだに出入していた人で、小沢三郎の書「幕末明治耶穌教史研究」(後出)に詳しい。

元来静岡県下ハ洋教ヲ学フ者多シ 就中中村敬之助ト云ハ舊幕ノ大儒聖堂ノ長ニテ 頗ル漢學者ニテ威儀正シキ性質ノ由然口ニ近年洋学ニ入り 当所ニテハビヤルソン 従前貯ル漢書類悉ク無用トシテ門人共ニ遺シ 専ラ聖書ニ力ヲ盡シ耶穌教ヲ以テ縣内ノ人々ヲ盛ニ勸ル由 乃チ杉山孫云杯モ同人一指麾ニテ聖書ヲ重ニ学フ由ナリ 己ニ二月下旬中村敬之助一族ノ娘共

三人ヲビヤルソンニ預ケニ来 起臥共同人館内ニテ致シ居ルナリ

元トビヤルソン「ブ

ロエン」クラビス」

ノ三女教師人自他

国共三才己エノ子供

ヲ一ヶ月十五弗ニテ

預リ教授ハ勿論起居

衣服等ハ至迄悉ク世

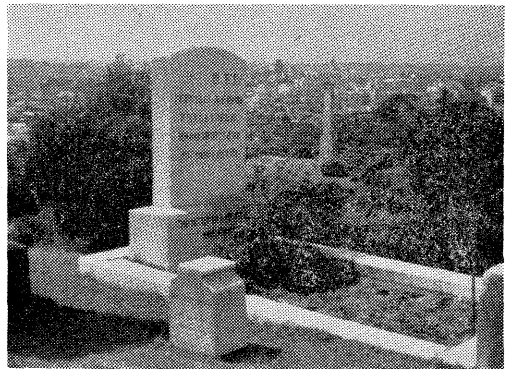
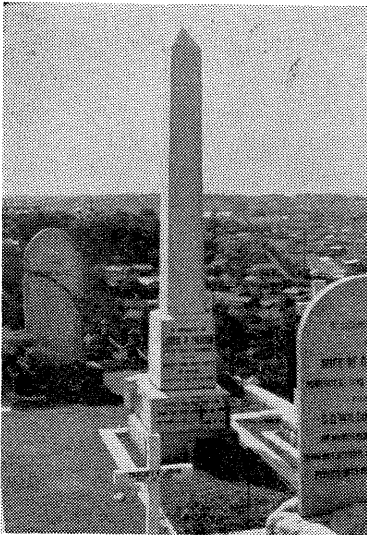
話スル規則ニテ洋人

ノ子或ハ日本ニテ生

マレタル間子或ハ西

ト支那ノ間子杯八十

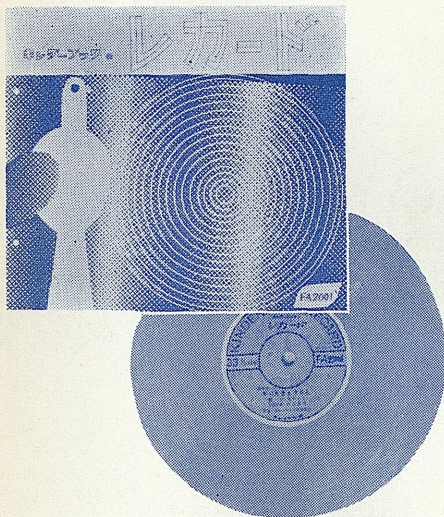
人余モ居レトモ真ノ



園での保育に！ ご家庭に！

新しいレコードTM誕生！

61年型の スマートなレコード！！



* 聞いて楽しく、みんなで遊べる（歌うカード）としてご好評をいただいてきました「キンダーブックのレコード」が、長い間の経験と研究の結果、こんど新しい型に生まれ変わりました。

* こんどは、とてもスマートです。

* 音色も、一流レコードとおなじです。

* 手軽で、安くて、楽しめる——これが新装レコードの魅力です。

* 内容は、日々の保育に、またご家庭での団らんにも最適のものばかりです。

* 「キンダーブック」と併せてお聞きくださると、レコードの楽しさが倍になります。

新装——
 FA 2001号（かわいい どうぶつの うた）発売中
 LP 盤 ・ 1 枚 ・ 33 ⅓ 回転
 毎月 1 回 発行 定価 60円 千8円

年間ご契約の方に限り
 ●一年の終りに、保存用美麗レコード・アルバムを進呈いたします。

申 込 書

* 新しい「キンダーブックのレコード」（定価60円）

FA第 号より 年間

部ずつ

* 「キンダーブック」（A4判16頁・別冊「つばめのおうち」と教育付録つき・定価50円）

36年度 月号より 年間 部ずつ

昭和 年 月 日 () (住所)

フリーベル館 () (芳名)

保 育 館 御 中

発行...株式会社 フリーベル館

日本ノ子ハ一人モ預ケルモノナカリシカ此度静岡ヨリ来ル三人ノ娘カ日本人ノ預ケ始メルナリ。(三四九頁)

後にわが国の幼稚園の發展に貢献した、東京女子師範学校初代撰理(校長)である中村正直が、この施設と深い関係があったことは興味深く、また後に、東京女子師範学校附属幼稚園初代監事(園長)をつとめた関信三も、ちょうどおなじ頃に横浜の宣教師のあいだに出入していたのであって、この施設のことをよく知っていただろうと想像して間違いない。当時の識者の幼児教育に対する関心は、この頃から醸成されていたと考えてよいかもしれない。

「亜米利加婦人教授」は、はじめラシャメンとのあいだの混血児を対象としたものであったが、実際に始めてみると、混血児問題はそれほど大きな問題でないことがわかり、また当時において、幼児を集めることもむずかしく、翌年の明治五年十二月には、「日本婦女英学校」(後の横浜共立女学校)として、女子教育の道を進んだ。(注)

(注) 文明開化の明治初期にあたって、新知識を吸収しようとして英語を学ぶものは多かったのである。後に述べる「幼稚二遊戯の園」の画家武村耕鷗女史も、明治六、七年に、ここで英語を学び、また基督教にふれてゐる。

ブライン女史は間もなく病氣のため帰国したが、その後女学校の校長として貢献し、クロスビー女史は、日本における初期の讚美歌の翻訳者として貢献している。有名な子どもの讚美歌「主我を愛す」はクロスビー女史の訳である。(注) 横浜の外人墓地には今もピアソン女史とクロスビー女史の墓が並んで立っている。(写真参照)

(注) ピアソン女史については、山本秀輝著「日本基督教会史」日本基督教会時代初期、その四、二六六頁、二六七頁に、クロスビー女史については、「同書」第五章「日本基督教一致教会時代」その三に記述がある。

(津守)

三、鴨東幼稚園 その他

つぎの節で述べるように明治八年になって「幼稚遊嬉場」が設立されるが、これより以前には保育施設は前述の「亜米利加婦人教授所」以外にみあたらない。

しかし伝聞が残っているので、京都に幼稚園が一つあったかも知れない。また書いたものが残っているものとして、名古屋に幼稚園が一つあったようにも考えられるが、これも現在のところ何とも言えない状態である。

A、鴨東幼稚園(一八七三年頃)

明治六年に鴨東幼稚園(このような名称をつかっていたかは明らかでない)が、京都の建仁寺附近に外国人によってつくられていたようである。このことについては文献がないので確かなことは言えない。

現在京都市女子大学の附属幼稚園になっている私立京都幼稚園の創立者、岩井栄之助(号を藍水と称した)は明治六年頃に外国人のつくった鴨東幼稚園に通っていたという話を、生前京都私立幼稚園協会長である山名義順に話していたといわれる。岩井栄之助は昭和三十三年に九十歳で亡くなったが、その夫人岩井つたも京都幼稚園の先生をずっとしており、ともに幼稚園教育に熱心な人であった。

山名はこのことについて、「京私幼」につきのように書いている。

「わが京都は、日本の幼稚園教育の揺らんの地であることは、日本の幼稚園史の明らかになっているところでありませう。しか

も、明治八年十二月に柳池校に幼稚遊嬉場が開設されましたが、それ以前に建仁寺境内に外人の経営ではあったが、私立幼稚園（鴨東幼稚園と名づけていたという）らしいものが存在していたと伝えられておりますことは、日本幼稚園史上注目すべきことであります。

〔京私幼〕No. 1 三四・九・一〇号

鴨東幼稚園については、現在のところこれ以上の資料がみあたらないが、伝聞の経路がしっかりした人であり、その頃の京都のふんい気からして、幼児保育施設が実際に存在していた可能性が考えられる。ただし京都で山名のほかに若井の話をきいた人をさがしたが、現在のところはまだみつからない。（村山）

B、伊沢修二の保育施設（一八七三、四年）

愛知師範学校の校長をしていた伊沢修二は、明治六年に愛知師範学校に幼児保育施設を設けたことを「日本の小学教師」の第九十七号に書いている。

これが事実とすれば、わが国の人によってたてられた最初の保育施設（維新以後の）は明治六年にできたことになる。

貴族院議員になった伊澤はこのことを明治四十年十二月に発行された「京阪神連合保育雑誌」（愛珠幼稚園蔵）に、「幼稚園の一新紀元」という題の論説で載せており、そのなかで、「幼稚園に就ては実は自分が始めて教育界に導入った頃即ち明治六年に愛知師範学校に於てその端緒を用いたと申しても宜い」と言っている。

すなわち彼は幼稚園という名はつかわなかったがフレーベルの幼稚園に似たことをはじめたとして、つぎのように説明している。

その当時に於ては無諭幼稚園と云ふ名は無かつたけれどもグリコーゲルと云ふ人の著しし幼稚園の書物を見て自己流にして兎も角もフレーベル式の幼稚園に類似した仕事を創めたのである」（二頁）

この内容は、彼がわが国で行なわれている幼稚園教育について批判した論文のはじめに述べられているものであるが、最初に

拝啓陳ば京阪神連合保育会雑誌第十九号一覽致し候処其中に昨年十二月老生其地方漫遊の際貴会員の為講説せし幼稚園事業と題する記事有之全体甚だ不十分なるのみならず事実を轉倒せしと覚ゆる所も有之甚だ迷惑致し候に付次号を以て右全文を取消の上別冊日本の小学校教師第九十七号に記載有之候幼稚園の一新紀元と題する論説を更に御轉載相成度此段御照會に及候也
明治四十三年九月十日
伊澤 修二

大阪市保育会長

大村芳樹殿

として掲載されたもので、単なる講演の筆記ではない。

この文章からだけ察すると、明治六年に幼稚園ができたように思われる。しかし彼がここで「蝶々々々」という歌は愛知附近にある童謡にもとづいてつくったものであると述べているのに関連して、この歌について伊沢が文部省に報告している文章をみると、保育施設の存在に疑問がもたれる。

すなわち彼は、さきほどの文につづいて、つぎのように言っている。

その当時為したもので残って居るのはその時用ひた唱歌がある即ち今日まで伝って居る「蝶々々々菜の葉に留れ菜の葉が飽い

たら桜に留れ桜の花の栄ゆる御代に遊べや遊べ」と云ふ歌である、この上の句は全く愛知邊にある童謡に基づいて出て来て居るので、只「桜の花の栄ゆる御代に」と云ふところ以下は後世新時代に適用するように野村秋足（当時愛知師範学校国語科の教師）と云ふ歌学者が之に附加へて、さうして今日まで傳つた「蝶蝶々々」の歌で出来たのである之が抑も幼稚園のことに自分が考へを起した初めてその後亞米利加に參つた時にも随分多数の幼稚園も見、それから日本に自分が帰つて来た頃には既に幼稚園と言ふものが出来て居つた、（一一二頁）

一方彼が明治七年の学事報告として文部省にだしたものをみると、つぎのようであり、幼年教育のことを述べ、保育施設には触れておらず、下等小学（二年〜四年生）の教科の内容として「蝶蝶々々」の歌を教えたことを言っている。

愛知師範学校年報

明 八・二・二六

伊澤 修二

将来學術進歩ニ付須要ノ件

唱歌 嬉戲ヲ興スノ件

唱歌ノ益タルヤ大ナリ

第一、知覚心程ヲ活潑ニシテ精神ヲ快樂ニス

第二、人心ニ感動力ヲ發セシム

第三、発音ヲ正シ呼法ヲ調フ

以上ハ幼年教育上唱歌ノ必欠ク可カラサル要旨ノ概略ヲ挙クルノミ其細目ノ如キハ蝶々此ニ辯セス我文部省早く此ニ見アリテ小学教科中唱歌ヲ載スト雖トモ未タ実ニ其科ヲ備フルモノア

ラス今吾輩西洋ニ於テ著名ナル教育士フレイベル氏其他諸氏ノ論說ニ從ヒ先本邦固有ノ童謡ヲ折衷シテ二三ノ小謡ヲ制シ日ヲ累ネ年ヲ積テ大成全備ノ効ヲ奏セン事ヲ期セリ。即チ其一二例ヲ左ニ示ス

唱歌ハ精神ニ娛樂ヲ与ヘ運動ハ支体ニ爽快ヲ与フ此二者ハ教育上并ヒ行ハレテ偏廢ス可ラサルモノトス而シテ運動ニ數種アリ方今体操ヲ以テ一般必行ノモノト定ム然レトモ年齒幼弱筋骨軟柔ノ幼生ヲシテ激動セシムルハ其害却テ少カラスト是レ有名諸家ノ確說ナリ故ニ今下等小学ノ教科ニ嬉戲ヲ設ク即チ左ノ因ニ因テ其一二例ヲ示明ス

因（略ス）

榘 唱歌

榘ヤ榘 榘ノ花カ用イタ中ノ心マテ開イタ。榘ノ花ハ萎ム時モアラウカ開ケタ御代ハ八千代ノ春マテモ萎ム時ハアラン

技態

胡蝶 唱歌

蝶々蝶々、菜ノ葉ニ止レ、菜ノ葉ニ飽タラ桜ニ遊ベ桜ノ花ノ栄ユル御代ニ止レヤ遊ベ遊ベヤ止レ

技態

（文部年報）

以上の結果、伊澤修二が附属小学校と別に保育施設を明治六年につくつたのか、小学校の低学年（この頃は学齡以前の幼児も小学校に入っていた）に「蝶蝶々々」の歌を教えたのを記憶がいいたものかよく分らない。そこで実際に名古屋市にある愛知学芸大学附属幼稚園に村山が行つて調べたが資料を発見できなかった。

なお、「入澤教育辞典」（昭和七年発行）には、伊澤修二（二五一

一―二五七七年)の項に、「……、同七年三月歳二十四にして愛知県師範学校長に任ぜらる、当時『教授眞法』なる書を著す。同校の附属事業として幼稚園を作り、そこに於て初めて唱歌を教授した。之我國の学校に於ける唱歌教授の嚆矢である。……」と述べられている。これによると明治七年に幼稚園をつくったことになる。

(村山、宍戸、岡田)

四、京都の幼稚遊嬉場(一八七五年)

わが国の公立の保育施設のうち最初のもは、京都の柳池学区にもうけられた「幼稚遊嬉場」である。

幼稚遊嬉場は、開設後一年半あまりで十年頃には閉鎖の止むなきに至り、しばらく中断してしまつたが、明治初年に、京都市のひとが幼児教育の重要なことに着眼していたことは注目し得る。

維新を成就した新政府は、一刻も早く先進諸国の列に加わろうとして、国民の教育に非常なちからをそそぎ、明治四年に文部省を設け、五年の「学制領布」や六年の「被仰出書」で教育の重要性を説き、国民教育について啓蒙をはかった。

すなわち、「学制領布」には、

……区内の人民六才以上の男女は総て小学校に入る者とし、学に就かざる者は其の理由を学区取締に申出ずる事、小学校は之を分ちて尋常小学校、女児小学校、村落小学校、貧人小学校、小学私塾、幼稚小学校等とし……

と述べられており、太政官の「被仰出書」には、「必ず邑に不学の戸なく家に不学の人なからしめざるべからざるものなり」とあり、新政府の教育への熱意がなみなみならぬものであったことがうかが

われる。

「学制領布」でいう幼稚小学の性質は幼稚小学は男女の子弟六才迄のものが直ちに実現できなかったように、幼児教育に着眼しながら「幼稚小学」も実現しなかった。しかしこの頃、村田文夫の「繪入子供草」(明治六年)、土居光華の「母の導記」(明治七年)、近藤眞琴の「子育ての巻」(明治八年)、近藤鎮三の「母親の心得」(明治八年)など、相ついで出版されているところから、一般の風潮として幼児教育への関心がおこつてきていたことが推察される。

わが国の人が作つたものうち最初の公立幼児教育施設である「幼稚遊嬉場」は、このような風潮のなかで開かれた。

しかしとくに京都に、幼稚遊嬉場が設立されたのはそれだけの背景があつたわけである。すなわちこの遊嬉場は、東京女子師範学校附属幼稚園のできる少し前に、何かポツツとできてすぐ消えたというように簡単にかかるく考えられがちであるが、もっと重要な意味をもつて成立したものであつた。

なぜ、京都に幼稚遊嬉場が開かれたかは京都市の歴史と関係するところが大きい。

千数百年の長きにわたつて、京都はわが国の首都であり、つねに文化の中心の地位を占めてきた。政権が実質的には武家の手に入り、関東が政治の中心となつて繁栄していたにせよ、天皇のおられる古い文化をもつ京都の人びとの矜持は高いものがあつた。

したがつて、幕府がおかれ、政権が京に復帰したものの、まもなく天皇が関東に移り、そこが文化や政治の中心となることになったとき、京都市民の驚きと悲歎は想像に絶するものがあつた。その市民の動揺にたいして、皇室は多額の米や金を下賜し、一方、市民は

それに感謝すると同時に、京都を維新後も文化都市としてますます発展させようとして努力した。すなわち、皇居が明治二年京の地を離れることになったので、京都の人びとは、新たな発展の分野を教育振興というところに求めた。当時の事情について「柳池校七十年史」(柳池幼稚園蔵)には、つぎのように記されている。

然るに時偶々東駕東幸の事決し、市民は驚愕失望殆ど為す所を知らざるものあり。しかれども、愾慮慙懃舊都の衰頹を軫念あらせ給ひ、京都市一般に現米一萬石、金拾萬兩を下賜し給ふ。此に於て官民深く感激し、誓つて舊都の面目を維持すると共に其の進展を策せんことを期し先づ教育の普及上進を圖り、人材を養成して實業を振興し、富力を増進することを以て急切第一の施策となすに至り即ち千障萬難を排して之が遂行に努めたりしが其功空しからず 京都は全國に率先して教育機関を創設し範を全國に示せしのみならず中央政府をして一時其標準を本府に需めしむに至れり (二六頁、一七頁、昭和十七年六月、京都市柳池國民学校 京都市柳池町内会聯合會發行)

このような事情を背景として、当局者は、室町時代から存在した対立している町組織の統合をはかり、小学校設置の努力をつづけた。この結果、全國に卒先して明治二年五月に小学校の設立をみた。「京都市立学校園沿革」(昭和三十一年三月京都市教育委員会発行)は、当時の模様をこうのべている。

・遂に同年八月市中を上京、下京と各大組とし又上京に四十五番組、下京に四十一番組を区劃し、学校設置の緒をつくつたのである。かくて同年十一月、右の内三十三番組より小学校建

設を申し出て自餘の各組も相次いで上申するに至つて学校建設の機運が漸く熟して来たので、同年十二月創設費用として金約八百円を各組に交はし、内半額はこれを下賜とし、半月はこれを十ヶ年賦を以て返還せしめることとし、更に翌二年一月、番組の整理となし上京を三十二番組、下京を三十三番組計六十五番組と改められた。ここに於て、学区の基礎が略々確立された。かくて小学校設置の準備が着々進むに従つて明治二年二月教師を募集し、同年五月、教則を定めたが同年五月二十一日、上京第二十七番組小学校(現柳池小学校)を全國の魁とし下京第十二番組(現豊園小学校)下京第十三番組小学校(現開智小学校)が相次いで開設せられ、翌三年末までには市内六十四校の設置を見るに至つた。(二頁)

このように初期の小学校は、文化都市としての伝統を栄えさせていく目的をもっていたために、単に子どもが四科目を学んで来る場所にとどまらないで、社会的な施設としての役目ももっていたが、このことも保育施設をつくる一つのいとぐちとなつたものである。「柳池校七十年史」には、つぎのように述べている。

——尚、当時の学校経営趣旨を纏ぬるに学校を以て単に教育を施す場處とするのみならず、組内自治中心となし、公衆會同の場處となすは勿論、保安警察並に衛生施設上の屯所にも充て教育施設並社会施設全般の機関として活用せんとするにありたり、(二十頁)

以上、きわめて長いあいだにつちかわれた都びとの底力と文化的な教養が教育熱ということにあらわれ、東京府よりもさきに小学校をつくることになつたが、さらに八年に最初の幼児保育施設を創設

するに至った。この保育施設は、その翌年つくられた東京女子師範学校附属幼稚園のように政府によって作られた（したがって別に東京でなくても出来た）ものでなく、民衆の自然の力がみられるものであり、公立ではあるが現在わが国の大多数を占める私立幼稚園の開拓者という意味ももっている。

それどころか、先ほど京都の人びとの教育熱のあらわれの一端だと言ったが、偶然あらわれた単なる一端でなく、その最も高い峯であり、あらわれるべくしてあらわれたものであるということができ

る。
すなわち、明治初期の京都の人びとは、自分たちの民意をもち上げて、これを組織し、制度化することがうまく、教育熱を上手に実を結ばせ、以上のように早くから小学校をつくったが、なかでも柳池校は鳩居堂の主人が計画して組内の少年を集めて、小学・三字経・論語・日本外史などを教えていたのがもとになり、明治二年五月二十一日に上京二十七番組小学校として文部省の開設や政府の教育奨励に先立ってできたわが国最初の小学校であった。これは、四書五經心学道話などを教えていたことから随分古いことが分るが、このわが国最初の小学校はさらに明治六年には女紅場をもうけたり、役場を学校の一部につくるなど、庶民教育の総本山となろうとしたことが察せられる。

ここに、京都市民のエネルギーの結果として、いわば下から盛り上がった、しかも一般大衆の庶民教育としてわが国のモデルスクールになろうとした学校があらわれたわけである。そしてこの学校が、ゼルマン地方には大小学のほかに学齡未満の幼児のための幼稚園がつくられているから、庶民教育の総本山である自分たちの学校でも当然これに注意して幼稚園教育をするべきではないかという考

えで、わが国民による最初の保育施設を開設したのであった。

すなわち明治八年十二月に、上京第三十区において小学校の一隅に遊嬉場を設け学齡に達しない幼児を保育した。その二年前、すなわち、六年に上京第三十校は校舎を移転し、柳池尋常小学校となっており、遊嬉場はそのなかに附設された。

この柳池校附設幼穉遊嬉場の開設の動機と、それがどのようなものであったか、については「幼穉遊嬉場概則」によって知ることができるが、ここにみられるように関係者は「本邦小学の嚆矢」という榮譽を幼児教育のうえにも獲得すべく創設を意図している。

幼穉遊嬉場概則

側二間、五州中文運隆盛ヲ以、称セラル、日耳曼地方ニハ大小囊ノ外、教所ノ嬉戲場アリテ学齡未滿ノ稚兒ヲ出シ、遊嬉娛樂ノ中ニ於テ發明ノ能力ヲ誘導シ他年就学ノ基ヲ立テ女師ヲシテ之レヲ教育セシムト。其方法ノ善良ナル未悉サスト雖モ、洵ニ羨思スル所ナリ、而我柳池校ノ若キ維新以還、本邦小學ノ嚆矢ニシテ其設ケ府下六十有余校ニ先チ從テ成業ノ徒モ多ク、嘗テ府庁ノ恩賞ヲ蒙リ区内ノ榮トスル所ナレバ猶注意ヲ加ヘザルベケンヤ彼我制ヲ異ニスル所アリ教育ノ方法未ダ備ラザレドモ、其一端ヲ挙ゲ以他日ノ大成ヲ俟ツ。概則左ノ如シ

- 一 下等小学校教育方ノ大概ヲ知り得タル老實ノ婦人一名ヲ債ヒ、仮ニ教師トス
- 一 校内ノ一隅ヲ以テ嬉戲場トナシ稚兒ノ学齡ニ至ラサル者ハ年齡ヲ問ハズ、陥頭街上ノ遊ビニカヘ此ニ入場シ或ハ兄弟或ハ姉妹乳母モ保傳モ共ニ來テ隨意ニ遊戯シ然シテ教師ノ指揮ニ從フベシ

一 稚児教育ノ法ニ於テ其宜ヲ得ル極メテ難シ、課業ヲ設ク
レバ厭苦倦却ス。且稚児ノ性タル定意ナク多時一所ニ居ル
ヲ欲セズ。故ニ課業ヲ設ケズ、動惰ヲ問ハズ、進退出缺モ
亦之ヲ制セス。

一 稚児ノ発才ヲ誘導スルハ玩具ニアルノミ、有益ノ具ヲ弄
セシメ、而教師之ヲ指示シ、日何、日何、ト稚児ヲシテ聲
ニ応ゼシメ、随ヒ示シ隨ヒ応ジ、數回之ヲ行ヒ記得スルニ
至テ亦他品ニ遷ル。其齡ノ漸ク進ムニ從テ少ク言語ヲ解セ
バ品物ノ功用ト性分トヲ講釋シ、児ノ見聞ヲ宏ニス。

一 場中布置スベキ玩具之レヲ大ニ備ント欲セバ、天造ト人
工トノ種類タダ數百品ノミナラズ、之ヲ少ニセバ教育ノ功
鮮シ。於是聊斟酌ヲ加ヘ給與スル所如左。

一 立方形小片大幾百箇

一 家屋城樓等ヲ模造シ發才ヲ試ルノ具トス

一 平方形ノ小木牌幾百箇

一 單語函ノ如キ草木鳥獸ヨリ食物器財ニ至マテ一枚一

圖ヲ畫シ(五十音圖モ有ベシ)云何ヲ諭スノ具トス

一 賢人名媛ノ行跡ヲ圖畫セル繪本又小学入門ノ如

キ、品物ノ形似ヲ知ルベキ繪本幾十冊。

一 稚児ハ繪ニ就テ目ヲ怡バキシメ教師傍釈ヲ加ヘテ実

業ヲ知ラシムルノ具トス。

右齊整ニアラズト雖モ群児ノ街頭ニ飄遊シ、鄙野ノ惡弊ヲ被
ルナク所謂遊嬉中ニ於テ英才ヲ養ヒ庶幾クハ他日勉學ノ基トナ
ランカ。尚之ヲ實際ニ施シ而後闕漏ヲ補フベシ

明治八年十二月 柳池校(柳池校七十年史三八頁~四〇頁)

この「概則」にみるように、一般に幼児教育が考えられず、幼児
が放置されていた当時に憂い、「群児ノ街頭ニ飄遊シ、鄙野ノ惡弊
ヲ被ル」ことのないように、「遊嬉中ニ於テ英才ヲ養ヒ庶幾クハ他
日勉學ノ基」をつくりたいと考えていた。これは必ずしも独創にな
ったものではなかったが、わが国最初の幼稚園である幼稚遊嬉場は
偶然早くできたというようものでなく、京都市民の大きな理想の
あらわれとしてできたものであるといえる。

なお幼稚遊嬉場の後身として、二十六年に私立の柳池幼稚園がで
きており、現在は京都市立柳池中学校の一隅にあるが、遊嬉場時代
の資料はまったく残っていない。幼稚遊嬉場については、以上あげ
た文献のほかに、「京都小学五十年史」(大正七年発行)がある。

(村上、豊田)

日本保育学会第14回大会

会期 昭和36年5月20(土)~21(日) 日

会場 お茶の水女子大学

第十回教育実際指導研究会

会期 昭和36年6月2(金)~4(日) 日

会場 お茶の水女子大学付属幼稚園

主催 お茶の水女子大学付属幼稚園

幼児教育研究会

予

告

一九六一年で本誌は六十巻を迎えた。六十巻というと、六十年間にわたって、毎年十冊以上の雑誌が発行されつづけてきたことになる。合計すると七百冊以上になる。「幼児の教育」誌の前身である「婦人と子ども」が創刊されたのは、一九〇一年で、明治三十四年であり、「幼児の教育」と改題されたのは大正八年である。この六十年の間の日本の社会の変動はきわめて大きかった。「婦人と子ども」発刊後間もなく、日露戦争に当り、軍国美談などを幼児のための談話の材料としてとりあげねばならないような社会情勢であった。しかし、創刊のころより、旧式の幼稚園教育法を批判し、進歩的な新教育の主張や論説、実際などを掲載しつづけている。大正時代には第一次世界大戦を経て、つづいてわが国も世界的な不況の波を蒙るのであるが、この間は幼児教育界にとっては、新教育の理論と実際とが確立した時代であった。創刊号からずっと目を通してみると、初期のころからの進歩主義的主張が、大正末期より昭和初期にかけてみごとに開花しているのを見ることが出来る。幼稚園制度史上特筆すべき幼稚園令の施行も大正十五年である。この時期に幼児の生活の中に基礎をすえた幼児教育は、これにつづく日本の社会

の大動乱を経て動揺することが少なかつたと言えよう。支那事変、大東亜戦争と、世界史の中における日本の位置は目まぐるしく変化し、国民生活は窮迫の路を辿るところでは私も自身も身近に体験したところである。「幼児教育誌」上にも戦争の波が打寄せる。しかし、これは教育の深層にまで及ばなかったのは幸であった。戦後、学校制度が改革され、小中学校では教育原理が顛倒したときも、幼児教育はその歩調を乱される必要はなかった。社会の変動とはかわりなく、幼児教育は常に静かに、その歩みをつづけていたのである。戦後の教育界には新しい技術や材料が提供されてきた。幼児教育もまた、新しい技術や材料をとりいれ、また生み出してゆく。しかし、それは幼児が吸収し消化してゆくことのできる範囲内においてである。これから先の子どもがどのような方向に向かってゆくのか予測することはできない。しかし、私どもの歩みは過去に対する深い洞察に根ざし、人間の真実な理解に基づき、新しい方法をとりいれてゆかねばならない。新しい社会において、この雑誌が負わされている使命をどのような形で果してゆくことができるのか、今後にかげられた課題である。

幼児の教育 第六巻 第四号

四月号 © 定価 六十円

昭和三十六年三月二十五日印刷

昭和三十六年四月 一 日発行

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

編集兼 津守 真
発行者

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五番地

印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社フレール館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌の購読についてのご注文は発売所フレール館にお願いいたします。

みんなでのしく

(うたっておどってあそびましょう)

監修者

文学博士 児童心理学	波多野勤	子
お茶の水女子大学教授	戸倉ハ	ル
文部省文部事務官	玉越三	朗
お茶の水女子大幼稚園	村田修	子
文京区立第一幼稚園長	山村修	き
文部省教科調査官	真篠	将
ゆかり文化幼稚園	藤田	子
東京教育大付小教諭	小林つ	や
東京都指導主事	安藤寿	美
		江

(いろは順)

(監修のことは)

幼児は音楽の経験やリズム表現の経験をして、幼児なりに美しい心情を伸ばし、その生活をますます豊かにしていくことができます。

したがって、幼稚園や保育所ではよい音楽をたくさん聞き、いろいろな歌を歌い、また簡易楽器に親しんだり、あるいはリズムにあわせて自分の感情を自由に身体で表現することなどがきわめて重要であります。

しかし、これを実践する場合には幼児の特質や、その成長発達にあわせてむりのないように行なうことがたいせつなのはいうまでもありません。ところがいざそのような角度から保育に役だつレコードを使おうとしますと、安心して使えるようなシリーズが見当らず、幼児教育に直接あたっている者はこの点でいつも苦勞をしてまいりました。

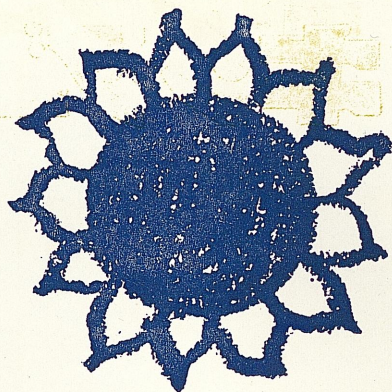
このたびキングレコード株式会社が保育レコードシリーズ「みんなでのしく」を出されることになりましたので、わたくしたちは、幼児教育のためによりよいものをつくっていただくとうと進んで協力することになりました。

私たちはまず実際に役だつこと。つかいやすいこと。という現場の立場をいつも忘れずにしかも内容をよいものにするため、すでに12回も協議をかさねて検討し、ようやくこれをつくりました。したがって必ず皆様のお役にたち、ご満足いただけるものと確信しております。

なお、監修にあたってはとくに次の点に留意いたしました。

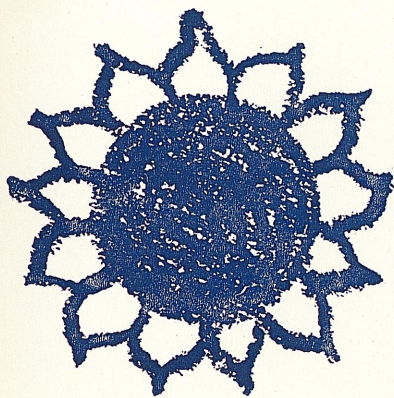
- 1、幼稚園教育要領・幼稚園のための指導書音楽リズム編・保育指針で必要とされている経験のうち、基本的なものを年間を通してあげる。
- 2、歌ったり聞いたりおどったりする経験に役だつものばかりでなく、幼稚園や保育所での幼児の生活全体の中からレコードによって保育効果があるものを取りあげる。
- 3、幼児の特質や成長発達に応じたものを取りあげる。
- 4、1つの教材がいろいろな経験に役だつようなものを取りあげる。
- 5、必要に応じて新作をくわえる。
- 6、指導書を添えて有効に活用できるようにする。
- 7、家庭でもそのまま使えて効果があがる。

みんなで
うたい
ましょう



母とおさなごの歌

編集／東京都私立幼稚園協会



幼児向のやさしい歌ばかりです。
手軽に持ち歩くことができます。
季節の歌、そのほか内容が豊富で
す。
家庭でのだんらんに、園でのだん
らんにきっとお役に立ちます。

発売／フレーベル館

新書判72頁 定価50円園納45円

古い歴史と新しい編集の観察絵本

キンダブック

—第16集 第2編 5月号予告—



A4判 16頁
毎月付録付
定価五十円

☆お子さま方の感情と知識を

豊かに育てる絵本☆

《5月号内容予告》

そらをとぶ

☆ふうせん

☆そらをとぶ

え・吉沢廉三郎先生
え・武井武雄先生
詩・さとうよしみ先生
曲・中田喜直先生

☆ひこうせん…ふうせん

え・林義雄先生
え・吉沢廉三郎先生

☆ぐらいだー…かみの

ぐらいだー
え・鈴木寿雄先生
え・吉沢廉三郎先生

☆ひこうき…もけいひこうき

え・鈴木寿雄先生
え・吉沢廉三郎先生

☆へりこぶたー…たけとんぼ

え・北田卓史先生
え・吉沢廉三郎先生

☆ろけつと…はなび

文・しばの・たみぞう先生
え・北田卓史先生
え・吉沢廉三郎先生

解説・井沢桂二先生

☆たのしい おもちゃばこ

文・飯沢匡先生
え・土方重巳先生

☆おちゃめの ちびぞう

えと文・和田義三先生
えと文・和田義三先生

別冊付録「つばめの おうち」
工作付録「こいのぼり」

東京都千代田区 株式
神田小川町1の3 会社

フレール館

電話東京 (291) 7781~5
振替口座 東京 19640 番